妙な学園生活

rouge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妙な学園生活

【Ｎコード】
Ｎ６６８７Ｄ

【作者名】
ｒｏｕｇｅ

【あらすじ】
使徒は普通ではない高校生。そんな彼と、普通の高校生達＋変な姉妹とのちょっと不思議な学園生活。笑いあり、切なさありです。恋愛に悩む使徒を確と見てやってください

プロローグ

キーンコーンカーンコーン
「じゃあな！」
「またね！」
今日も一日が終わった。
やっと帰れる…
校門まで来た。
今日もいつもと変わらない、変わってるのは俺だけだ。
うん、何事もなく終わったぞ。よしよし。
「使徒〜！今日もお前ん家行っていいか？」
ぐ……これもまた、いつもと変わらない…
「あぁいいぞ。いつもどおりな。」
俺は高校1年生になったばかりの神野使徒（かみのしと）。
さっき話しかけてきたのは、タメの千葉光（ちばひかる）。
共に同じ小学校、中学校、高校と進学した。
よって自分から望んだわけではないのだが、自然と親友という形になった。
「あんたたち、いっつも一緒ねぇ…そんなんだから彼女いないのよっ！」
うっぜぇ〜人が気にしていることを…
コイツは鈴音凛（すずのねりん）。俺の片思いの…いや、なんでもない。
「凛が男子からモテすぎてんだよ」
うんうん、と心の中で悔しがりながら賛成。
「つか、私ちゃんと全員振ってますから」
「いやいや、贅沢はするもんじゃないよ」
凛は男子から滅茶苦茶モテるのに、何故か彼氏を作らない。
そのおかげで俺は報われているのだが…
「乙女は好きな人を待ち続けるのよっ」

俺たちを通り越して走っていく。
「また明日ね！」
背中に垂れる髪が風に靡き、バックに夕日が来るとより一層可愛い。
「何なんだあいつは…」
「同クラだからしゃーないじゃん」
同クラだったらウザくてもかまわないと？
「まっ、そんなことよりさっさと帰ってお前ん家行くんで。じゃな！」
光もダッシュで駆けていく。
赤渕の派手なメガネで、茶髪に染めてるのにどこか子供っぽい。
「じゃあな…」
行ってしまってからポツリと呟いた。
気づくと、俺だけが学校に取り残されている。
早く帰ろう――

――俺は幼いころ、幸せな家庭で育った。
両親は仲が良く、裕福で、はたから見れば理想の家族だったかもしれない。
そんな家庭が俺は好きで、幼稚園から家へ帰ると、優しい母が包み込むように抱きしめてくれた。
幸せだった。
しかし、そんな家庭を壊したのは、他でもなくこの俺だ。
俺がまだ小学生だったころだ。
嫌いな子が急に転校していった。
そのときは、あいつ嫌いだからどっかいけ、と思っていたから、なんとも思わなかった。
きっと心から嫌いだったのだろう。
理由は覚えていない。
それからも変なことは度々起こった。
のどが渇いたと思い、自動販売機を前にしたが、お金を持っていな

かった。
落ち込んで下を見ると、ちょうど１２０円が落ちている。
さすがにそのときは不審に思ったが、大して気に留めなかった。
家へ帰りながら、今日はカレーがいいなぁと思ったら、カレーだった。
好きなゲームがほしいと思ったら、家に帰ると母がなんだかんだと理由をつけて、ほしかったゲームを買ってくれた。
無論、カレーが食べたいとか、ゲームがほしいとかは口に出していない。
正直、自分で自分が分からなくなった。
思ったことがそのまま反映される。
偶然だ、偶然だ、と思っても、偶然では済まされない。
こんな自分が怖くなって、母に相談した。
すると母は、俺にこう言った。
「そんなの……化物じゃない……」
小学生だった俺には苦しくて、受け止めることだけで精一杯だったのだろう。
その後の毎日は、苦しかったことしか覚えていない。
そして、やっと中学生になったあの日…
入学式には、両親は来てくれなかった。
まぁ今までと変わらない日常が続くんだろう、と思った。
しかし違った。
帰宅すると、親がいない。
少しながらの不安を抱えて、キッチンへ向かうと、テーブルに一枚の紙と預金通帳が置かれていた。
紙には、
私は親として失格です。ごめんなさい。本当にごめんなさい。
と綴られていた。
その紙は、しわくちゃで、涙のような染みがいくつもあった。
今だから思えることだが、母は必死に考えたんだろう。

考え、悩んで、出した答え……
それが…これだ。
別に母や父を恨んだりなどしていない。
恨んでいるとすれば、自分を恨んでいる。
何度か死のうと思った。
痛い死に方は嫌だと思ったから、俺の生活を滅茶苦茶にしやがった変な力で死んでやろうと思った。
でも…死ねなかった。
あとから分かったことだが、小さなことなら短期間の軽い思いで叶うが、大きなことは心の底からの強い思いで、長期間思い続けなければ意味がないらしい。
きっと自分が可愛かったのだろう。
心のどこかで、死にたくないと思っていたのだろう。
自分が憎かった――

――家に着いた。
自分の家とはいえ、やはり豪邸と呼ぶに相応しいものだろう。
「ただいま……」
返事が帰ってこないと分かっているにもかかわらず、いつも声を出してしまう。
慣れてしまったことだから仕方ないだろう。
いつもいる部屋に行くと、光がすでにいた。
「不法侵入者め…訴えてやろうか…」
「悲鳴を上げない君は、不法侵入者の共犯か？」
わけの分からない会話をしながら、カバンを降ろして部屋着に着替える。
「なぁ使徒…」
「なんだ？」
結構真面目そうに話しかけてくる。
「俺、この家に住んでいいかなぁ…」

何を言い出すかと思えば…
「お前には親がいるだろ」
光の家庭はごく普通の、ありふれた家庭だ。
俺にはそんな家庭がすごく羨ましい。
なのに、それを手放そうとは何たる事だ。
「ゴメン、聞かなかったってことで頼む」
意味が分からん。
「お前今日何時まで？」
「9時くらいまではいるつもり」
ふ～ん。今日はいつもよりも早い。
「俺のＰＣ知らね？」
「ここ俺ん家ですよね」
光がおもむろに頷く。
「勝手に私物置いたら、もちろん所有権は俺に有り」
「なっ！？」
声を裏返した…そんなに驚くなよ。
「ま…まさか…お前…捨てたのか…？」
「うん」
「ぎゃぁあああ！」
雄たけびを上げる光。
こんなやつ嫌だ…
「嘘だよ」
屈託なく嘘をつけるなんて、なんてやつだ俺。
「よかった……」
ほっとしたのも束の間、すぐさま形相が変わる。
「ま…まさか……中味見た？」
「うん」
「っぎ……」
一旦抑えた。
「嘘？」

「いや、君がまさかあんなものに興味があるとは、なかなか興味深かったよ」
「うぉぉおおお！」
泣きながら、プライバシーの侵害だとか、犯罪だとか叫んでいる。
「大丈夫だ。このことはお前が海野雫（うみのしずく）に片思いしている限り決してバラさん」
複雑な表情を浮かべている光…
「それは永遠にバラすことが無い、と捉えるべきか？」
「簡潔に言うとそうなる」
光の顔が真っ赤になる。
「使徒～てんめぇ～！」
家の中をドタバタと逃げ回る。
誰にも怒られることがないので、心置きなく逃げ回った。
光よりも俺のほうが家のことは良く分かっている。
俺を捕まえられるはずないだろう。
そんなこんなで遊んでいると、9時を回っていた。
「俺、そろそろ帰るわ。またな」
「おう。バラさないから二度と来るな。」
二度と来るなという言葉は、あいつが初めて家へ来てから言い続けている。
光は見事に無視するんだがな…
でも、俺はこんな毎日がいつまでも続いてほしいと願う。
こんな力を隠しながら、おびえながら生活するなんて嫌だが、仕方が無い。
誰にも気づかれずに、年をとって死ねれば、それでいい。
今日は満月だな。
月の光だけが、俺を慰めてくれているように思えた。

不審者は子供

朝、通学路を無視し、学校へ向かう。
家から徒歩か、自転車で行ける距離なので、非常に楽だ。
「おはよっ！」
光か。
「おはよう。変態君」
お前、今口から何かが飛び出たぞ。
「それは昨日言わないって約束しただろうっ」
耳元で囁いてくる。
「囁くな気持ち悪い。言わないから寄るな」
素直に顔を引く。
少し言い過ぎたか？
「…まぁ年頃なんだし、あぁいうのもいいかもな」
光の顔が著しく笑顔になってきた。
「やっぱ！？使途も分かってんじゃんっ」
いや、お前に同情したまでだ。
「ファイルにダウンロードしてからしか見れないやつもあるけど、直で見れるやつってやっぱいいよなっ！俺はやっぱり普通にやってるやつが一番いいかなぁ！」
「ゴメン、やっぱり引く…」
光がミスったという表情を浮かべる。
「お前も見てるんだろ？」
「誰がそんなことを言ったんだ？」
変なことをベラベラと喋ったコイツには、マジでうける。
「使徒ひでぇだろっ！」
「まぁ恨むなら自分の読解力を恨みたまえ」
悔しそうにしていたが、すぐに立ち直った。
「いいぜいいぜ！もう俺は自分の道を歩む！自分の道は自分で切り

開くんだぁ！」
言っちゃったよこの子。
「光が、自信を持って自慢できる人生を歩めるように願うよ。」
おっと、俺の話を聞かずに走り去って行きやがった。
ちくしょー。
学校へ着くと、朝のホームルームが始まるところだった。
「神野、遅いぞ」
「すいません」
そそくさと席に着く。
俺の隣に座っている光が、ざまあみろ！と言う顔でこちらを見てくる。
「では……」
ぐだぐだぐだぐだぐだぐだ…
つまんねぇ～。
よし。
鶴山のセンコーこけろ、こけろ、こけろ…
「うわぁ！」
ドッタン。
ぶっ…憐れだ。
みんなは爆笑している。
俺は鶴山を見ることが出来ずに外を見つめる。
「もういいっ！今日はここまで。」
すぐさま教室を立ち去る。
「鶴山、自分の頭と一緒で滑ったんじゃね？」
「腹の肉がボヨヨ～ンってなってたぜっ！」
みんなの笑いは止まらない。
きっと他クラスまで広がるんだろうなぁ。
少しかわいそうだったか…
「なぁ使徒！あいつマジうけるよなっ！」
「ちょっと酷かった。」

曖昧な表情を浮かべながら、一元目の準備をする。
「あぁ！数学の教科書忘れた！」
ふっ馬鹿め。
「どうしよー森、マジこえーからなぁ…」
ん～少しかわいそうだな。
「昨日学校の下駄箱の上においてあったけど」
「マジで！？」
光はまさに、光の速さの如く教室を抜け出していった。
そして、一分としない間に戻ってきた。
「ラッキー！あったぜぇ～。神よ、ありがとう！」
神は神でもこの俺、神野に礼を言ってほしい。
「あんた、予習やってあんの？」
凛が話に入ってきた。
「そんなのやってあるに決まって……」
青ざめてくる光。
「ない……」
心の中で笑いつつも、声に出して笑うと凛にどんな目で見られるか不安だったので、声には出さない。
微笑を浮かべる。
「私はちゃんとやってあるわよ～」
自慢げに見せびらかす凛。
「うぉおお！見せてくれ！」
「やだねっ」
光かわいそうだ…宿題のことまで祈っとけば良かったな。
でももうやってない、って知られちゃったから無理だ。
「頼む、凛様、見せてください…」
「へへーん。自分でやってこないほうが悪いんだよー」
そのとおりだ。
光の視線がこちらへ向かう。
「使徒！お前親友だよな！？」

「本当の親友は、厳しく高めあっていくもの」
「いいこというじゃん！」
床に崩れこむ光。
（別に予習くらい、やってなかったところで怒られるだけなのに）
「あのぅ…あたしでよかったら見せましょうか？」
後ろには、光の片思いの相手、海野が立っていた。
「ほ、本当か…！？」
光が涙を浮かべている。
「雫～甘やかしちゃだめだって」
凛を睨み付ける。
「でも可哀想ですし…」
「ありがとう！！！」
すぐさまノートを受け取る。
「よし！即行で移すぞ！」
キーンコーカーンコーン
「ぇ……」
そのときのチャイムは、きっと光にとって長い間忘れることが出来ないだろうな。
なんせ、宿題を見せてくれた相手が相手だ。
「ど～んまい！」
「あのぅ…ごめんなさい！」
2人とも席につく。
海野は言うまでもなく、自分のノートを持って…
「は……はは…は」
凍り付いている…
時間配分と言うものは大切だよ。
その後、暗い光と共に一日を過ごした。
「今日は最悪な一日だった…」
「周りからすればマジ面白かったぞ」
はぁ…とため息をついている。

「怒る元気すらないよ。」
「ははっ」
ゆっくりなペースで歩く。
「今日はお前ん家やめとく……」
「そうか」
無言が続く。
光が喋らないとこんなに静かなんだな。
分かれ道…
「じゃな！」
「おぅ…」
あれは重症だな。
明日元気になるように祈ってやるか。
家へ着くと、灯が点いている。
昨日消し忘れたっけ、とか思いながら家へ入る。
「ただいま…」
「おっかぇり～！！」
なっ……
「誰だお前！？」
言う言葉が違った。
普通、泥棒だぁ！とかそっちだろっ！俺の馬鹿…
「あたしはミクよっ。よろしくね！」
何が…よろしくだ！？
「何で俺ん家にいるんだよっ！」
「いやぁ～何か不慮の事故か何かで、ここに来たって感じ？」
「感じ？じゃねぇー！」
誰だコイツは……あきらかに小学生じゃねーか！
「あたしも捨てられたんだもん…」
は？
「あたしも変なことが出来るからママにどっか行けって言われたんだもん…」

悲しそうな瞳。
思わず同情してしまう…
「なんちゃって！」
「う……ふざけんなっ！」
俺のパンチをひらりとかわした。
「でも今言った事は本当よ」
「で、俺と何の関係がある。」
まったく、何なんだよコイツ。
「あたしは使徒の、とぉ～～～～～～い親戚なんだよっ」
「嘘つけ」
頬をぷぅっと膨らました。
「パパに、ここに行きなさいって言われて、鍵渡されたんだもん！」
待て待て…俺んちの鍵持ってるお前の父は誰だ！？
「１００歩譲って、お前が親戚だとしよう。もう１００歩譲って、俺ん家で預かったとしよう！お前は俺ん家でどうするんだ？」
「馬鹿ねぇ～学校行くに決まってんじゃないっ」
「馬鹿はどっちだ…俺はお前なんか小学校に通わせる気はないっ！」
何喋ってんのよ的な顔でこちらを見ても、俺は通わせねーぞっ。
「高校行くからいいも～ん」
「いや、お前ガキじゃん？」
また頬に空気を入れて膨らます。
「高校行くのっ！あたし行くのっ！」
まさに駄々こねるガキじゃねぇか…
「分かった分かった。今日は大人しく家に居ろ。」
「はーいっ！」
顔があまりにも子供っぽく、可愛くて怒りがおさまってしまった。
これからどうなることやら…
先が思いやられる…

ばれた…

リリリリリリリ
「ん…ん～朝か…」
リリリ…ポチッ
何故か布団の中に、やわらかいものがある…
「うわぁっ！」
俺の布団の中にミクがいた…
「ふへ……」
目をこすって眠そうにしている。
「お前、なんで俺のベッドの中に入ってんだよっ！？」
「はひ…？俺のペットになってくれ…？」
完全に寝ぼけてやがる。
ったく…
「まぁいい。学校行く準備するから。そこで大人しくしてろ」
顔を洗い、歯を磨いて下へ降りる。
ん？飯の匂いが…
テーブルの上には、朝食と紙が置かれていた。
「あいつがやったのか？」
紙には下手な字で、いってらっしゃいと書いてある。
そうか。一度起きて、もう一度ベッドに入るときに間違えて俺のベッドに入ったのか。
「かわいいじゃん」
「ホントに！？」
ミクが後ろに立っていた。
長い髪を結んでいるようだ。うまく結べずにイライラしている。
「あぁ、お前が今後ろにいなかったらそう思ってた」
髪を結ぶのを手伝う。
サラサラとしている金髪の髪は、すごくきれいだ。

「ありがとっ！」
満面の笑みを浮かべたミクはかわいらしい。
「これ、ホントにお前が作ったのか？」
椅子に座りながら問いかける。
「うんっ！パパもママも作ってくれなかったから……」
どうやら昨日言ってたことは本当らしい。
「食べてみて。絶対おいしいよっ！」
テーブルに両肘を着いて、短い足を椅子の下にブラブラしながらこちらを見ている。
正直、食べづらい…
魚を一口食ってみる。
「おいしい」
「やっぱねっ！」
ピョンッと椅子から飛び降り、俺の膝にのる。
「この魚はね、柚子味噌がポイントなのよ！これはねぇ……」
なんか変なガキだなぁ…
「あっ俺そろそろ学校行かないと」
ミクを抱き上げて、床に降ろすと怒っていた。
「おいっ！こんな家にあたしだけを残すつもりっ！？」
「あぁ。誰も来てくれと頼んだ覚えはないからな」
あれ？待てよ…
「ひっどー！だから経験０で、彼女も出来ないのよっ！」
「うるせーっ！」
ませガキめ…俺だって彼女くらい……ほしいわっ！
さっさと家を飛び出して学校へ行く。
はぁ……学校へ行っている最中に思った。
あいつが来たのは、俺が望んだからだ…
ただいま、と言った時、返事がほしい。
朝食ぐらい、誰かに作ってほしい。
そういったことを考えてたから、あいつが来たんだろう。

「おはよっ使途！」
「おはよ……」
これじゃ立場逆転じゃないか…
「元気ないな？」
「お前は立ち直りが早すぎだ。」
というか、俺が祈ってやったんだっけ？
「ふふふふふ。俺は思ったのだよ。昨日のことがきっかけで、今日はきっと話しかけられる、とね。」
腹の立つ口調で話しかけないでもらいたい。
「そうか、せいぜい頑張れ。」
「お前、やっぱ変だぞ？」
そりゃ家に帰って、自分と同じ境遇のガキにあったら変にもなるさ。
学校に着いた。
今日はセンコーうぜぇとか言って、こけさせたりはしないでおこう。
席に着くと、凛が話しかけてきた。
「今日転入生来るって！もしかしたらあんた達の初恋になるかもよっ！」
「俺はすでに恋してるんだよっ！」
本気で反論する光。
「ぷっ…むきになりすぎっ」
「俺だって……」
ぼそりと呟く。
「俺だって何？？」
「聞こえたっ？」
まずい、聞かれてしまった。
「何？好きな人いるの？」
「あ…いや、その……」
顔が近い……赤面する。
ガラガラガラ
教室の戸が開いて、先生が入ってきた。

「席着け～」
助かった……
「あとで絶対聞きだしてやる…」
どうやら今日は逃げ続けることになりそうだ…
「今日はまず転入生を紹介する」
おー！
歓声が沸く。
「せんせー！男子ですか？女子ですか？」
その質問に、みんな息を呑む。
「女の子だ」
うぉおお！
男子から更なる歓声が沸き、女子は少し残念そうにしている。
俺は特に興味をそそられることも無く、空を見つめ続ける。
「じゃあ入ってくれ。花園ー」
ガラガラガラ
興味がないとは言え、転入生の顔くらい拝んでおこうと思い、ドアのほうを向く。
なっ！？
「はじめまして。花園美紅（はなぞのみく）です。ミクって呼んでください。よろしく」
男子の目がハートマークになるのが分かる…
「おい、めっちゃカワイイじゃんか」
「背ちっちゃー。俺タイプかも」
「いやいや、あれカワイくないって言うやつの方がおかしいって」
いろんなところから声が聞こえる。
確かにカワイイよ。カワイイけど……
あいつ…なんで…
「えーっと…じゃあ神野の後ろにでも座ってくれ」
ぎゃーーーーー！悪夢だ…
「神野さん。よろしくお願いします」

誰だてめぇ…
グサグサグサ、グサ…
男子から、とんでもない視線を感じる…
手出したら殺すみたいな……
「分からないことがあると思うから、みんなしっかりフォローしてやれよ」
「は～い」
先生が教室を出て行く。
「おい、お前なんで……」
「昨日言ったじゃない。あたし、変な力持ってるんだって」
自慢げに答える。
「使途ぉぉぉおお！」
バーン！
「早速手出してんじゃないわよ！変態！ロリコン！童貞っ！」
俺の顔を思いっきり押さえつける凛。
ちなみに、俺は変態でもロリコンでもない。
童貞って……高1じゃ変ではないだろう…
「ミクちゃんっ！ゴメンね。コイツ馬鹿で。手だしたら私が殺してあげるからっ」
ぐ……
「ねぇ、どこから来たの？」
「ちっちゃくてホントカワイイよねっ！」
「髪金髪だよね～もしかしてハーフ？」
気がつくと、後ろには人が溜まっていた。
「いてて……」
「はっは。いい様だ」
光め……
「いきなり喋りかけるから悪いんだよ」
「るっさい……」
みんな…おかしいとは思わないのか…

そいつ、明らかに高校生ではないだろ……
「次、サッカーだから早く着替えに行くぞ」
はぁ…どうしよう…最悪だ…
「使途、聞いてんの？」
「あぁ……」
適当に返事を返す。
「お前朝から変だぞ？」
「いや、大丈夫だ。お前と違って変な趣味は持っていない」
立ち上がって更衣室へと向かう。
着替えて外に出ると、もうすでにミクのことが噂になっていた。
「授業始めるぞ～。並べ～」
体育の先生は優しくて、生徒からも人気が高い。
「じゃあ今日はサッカーだ。楽しめればそれでよし。じゃあ始めるぞ」
みんな自分のポジションへつく。
ピィィィ
開始の笛が鳴って、試合が開始される。
こんなことしてる場合じゃないのに…
ピィィィ
「２－１でＡ組の勝ち。礼」
「ありがとうございました～」
なんか俺たちのクラスが勝ったようだ。
佐藤とか、鈴木とかサッカー部のやつらいるからなぁ…
次の時間は……理科だ。
サボっても学力に影響はないと考え、屋上で昼寝しようと思った。
もちろん屋上は通常、出入り禁止となっているが、俺は天文部の幽霊部員なので鍵はある。
部長と仲がいいため、貸してもらえるのだ。
屋上で寝そべり、空を見上げる。
あ～雲って何でできてるんだっけ？

水だったっけ？
水蒸気かな？
いやいや、目に見えないものが水蒸気なんだから水だろう。
でも水だったら落下してこないか？
飛行機が通過して、飛行機雲が出来る。
ん？
あぁーもしかしたらガスなんじゃね？
でも、中学のときに「雲はガスです」なんて習った覚えはないし。
ん～なんだろう。
雲の陰から、太陽が顔を出す。
太陽がまぶしいなぁ。
そうだ。太陽はガスって習わなかったっけ？
太陽のことを学んでるときに、コロナとかプロミネンスとか習った覚えがある。
単語は覚えているが、どういうものかはさっぱりだ。
コロナは確か……分からん
黄道十二星座ってのも関係あったっけなぁ。
いや、無いわ。
あれは星座のことだった気がする。
あーそうそう。
天体の勉強してるときに、銀河と銀河系があやふやになって、非常に困った。
はっきり言って、違いが分からん。
銀河は…俺らのいる地球がある黄道十二星座がなんかで、銀河系は数１０００個？
あぁもう！分からん！
宇宙なんかどうだっていいじゃん。
なんで習うんだろうなぁ。
どうせ習うんだったら宇宙の外でも見てみたいなぁ。
でも……キーンコーンカーンコーン

何！？
昼寝の時間がなくなっちまった！
話が発展しすぎた…
くっそぉ～
どうする…教室へ戻るか。
いや、ここで教室へ戻っては、ここに来た意味がないのでは…
苦渋の選択。
どうせ教室戻ってもミクが来てるから、視線で殺されるし…
塚あいつなんで学校来てんだよ…
キーンコーンカーンコーン
何ぃ！？
またか…
もういいや…寝よ……

「起きて、使途。」
ん…んんん…眠い。
「誰？」
目を開ける。
「うぎゃぁ！」
なんとミクが腹の上に乗っている。
「早く起きなさいよー」
「じゃあお前退け」
んぐぐぐぐぐ…
「お前体重何キロだ？」
「３５キロっ」
嘘をつくな…
「本当は？」
「本当だよ？」
はぁ…

こんのガキめ…
後で仕返ししてやる。
「で、退かないか？」
「い～や～だ」
なんかミクの顔が近づいてくる。
「何っお前！？」
「お子様だと思ってるでしょ～」
周りにはクラスの男子が、死ねという目で睨み付けている。
「いやいや！思ってない。断じて思ってないぞ！」
どんどん迫ってくる。
「大人の世界へ連れてってあ・げ・る」
ぎゃーーーーーー！

「んぎゃぁ！」
夢オチかよ…
しかも俺、んぎゃあって……
「やっべ！」
もう夕日は傾いていた。
即刻学校を飛び出して家に向かう。
アイツ1人にさせとくと、何仕出かすか分からない。
ダッシュで道を駆け抜けていく。
「おっ！使途～。どこにいたんだよ。今日もいつも通り……」
「悪い！今日無理！」
横を猛スピードで駆け抜ける。
「やっぱり今日のあいつ、変だ…」
そんな言葉は今の俺には届かない。
家に到着！
灯が点いている。
「おいミク！お前どういうつも……」

見ると、夕飯の準備をしていた。
「何？何か用？」
コイツ…意外といいやつかもな…
「そっかぁ！ただいまのキスねっ！はいっ」
唇を突き出してくる。
「ばーか」
前言撤回だ。
カバンで頭を叩く。
「いったいなぁ…もぅ！子供虐待よっ！」
「自分で子供って認めてるくせに、なんで学校来たんだよ」
頬を膨らます。
「だって詰まんないじゃんか！」
理由になっていない。
「大体なんだよ神野くんって…」
「あら、じゃあ使途って呼んでもよろしくて？」
うぜー…ませたガキめ…
「まぁいい。問題は起こすなよ」
自分の部屋に入って寝転がる。
はぁ…でもあいつ、制服似合ってたな。
ん？
アイツが高校来たってことは2人で同居ってのはまずくないか？
「使途～！今日お前変だったから、見舞いに来たぜ～！」
やばい！光が勝手に家に上がってきた！
全力で下へ降りていく。
「光！入るなぁあああ！」
光が、キッチンとリビングのつながっている部屋へ足を踏み入れた。
「あら、千葉君だっけ？」
そのときのポジションは、ミクがキッチン、俺が廊下、そして光が入り口だ。
光がこちらを向く。

顔が真っ赤になっていた。
「こ……この……裏切り者ぉぉおお！」
「おい待てっ！っちょ……」
もう光は行ってしまった……
「どうしたの？」
クッソッガッキ……
起こる元気もない…
明日の学校が、非常に怖くなった…

マイケル？

ん～……
今日はなんだか、目覚ましが鳴ってないのに目が覚めた。
そうか、学校へ行きたくないからだ…
くっそぉーミクめ……
下へ降りると、昨日と同様、朝食が出来ていた。
なんとも朝がよく感じられる…
いやいや、今はそれどころではない。
「おはよ！使途っ！」
俺にジャンプで飛びついてきたミク…
しがみ付いたミクを、無理やり剥がす。
「いいか、朝から過激なのはやめてくれ」
「朝じゃなかったらいいのねっ！？じゃあ今日の放課後、学校の体育か……」
「死ね」
さっさと朝食を食べ始める。
ミクも、俺の隣に楽しそうに座って食べる。
なんでこんなに元気なんだ……
そりゃそうか…コイツには何にも関係ないもんな…
俺は同級生じゃなく、ただの世話してくれるお兄さん的な……
ん？俺のほうが世話してもらってないか？
ミクは自分の食器を片付けている。
なんて世話しない子だ。
ちょっと見直した。
「ミクは使途のお嫁さん～今は違ってもそうなるよ～♪」
スマン。さっきの撤回だ。
鼻歌がおかしいだろ…
「なぁ。お前、今の俺の心境分かってる？」

「早く彼女がほしい」
く…痛いところをついてきやがる。
「お前、危機感なさすぎ…」
「なんであたしが危機を感じなきゃいけないの？」
「俺とお前が一緒に生活してるとおかしいだろ」
やっぱりガキはガキだ…
許して、ごめんなさい、で済むと思ってやがる…
そんなんで済めば警察（いるが）いらないんだよ！
でも、今回の場合はどちらかと言うと弁護士がほしい。
俺のフォローをしていただきたい。
「大丈夫よ～あたし昨日、神様にお願いしたからっ！」
おぉ！なぜ俺は気づかなかった！
「じゃあ光は忘れてるのか？」
「ううん。忘れさせるのは無理だから、お友達ってことにしておいた」
それはそれでまずいのでは…
しかし、状況はマシになった。
学校への足取りが軽くなる。
おっと、時間がない。
「ミク！学校行くぞ！」
ミクがびっくりした顔をしている。
「別々じゃないとまずいんじゃないの？」
あぁそうだった。
「スマン、先に行く」
先に家を飛び出す。
そういやアイツ、どこに制服とか置いてあるんだ？
いやいや、望めばすぐに出てくるか…
よっしゃー学校ギリギリセーフ！
教室へ勢いおく飛び込む。
男子の視線が、昨日に増して痛い…

席につくと、数人の男子に囲まれる。
「使途くぅ～ん？君、もうミクちゃんと仲良くなったってねぇ～本当かぁ～い？」
「あ……あぁ、分からないこと教えてあげたら…そうなった」
バコン！
ひやぁ～机を思いっきり叩かれた。
「君は何もしなくていいんだよ～僕たちが教えるから～」
俺は事情聴取される犯人かよぉ…
男子たちの後ろで、光が笑ってやがる。
あとでコロス。
ガラガラガラ
やったぁ～先生だぁ…助かったぁ！
「コラコ～ラ！この人～ハ悪くないです～ヨ」
は？
「お前、誰だ！？」
男子達の間を通って、俺の真横に立つ。
「ワタクシ～ハこの人の弁護士～で、あるのデ～ス」
「誰？」
「マイケル＝インチキ、デ～ス」
確かにインチキだ。
なんでこんなやつが学校にいるんだ…
「あぁー！！！」
そうだ…俺が弁護士に来てほしいと思ったんだ…
「おい、使途！お前知り合いか？」
「いや、まったく知らん。つか、知りたくない」
みんな一斉に頷く。
「それ～は、それ～は、ヒッド～イんじゃ、あ～りませ～んカ！？」
みんなの顔がやつれ始めた…
「使途、許してやるからコイツどうにかしろ…」
「ワタクシ～はこの人～の弁護士～だって、言ってる～じゃないで

す～カ」
うぜぇ…
ガラガラガラ
「みんな早く席に……誰だ！？お前は！？」
「おやお～や、見つかってしま～いましたネ」
「不審者だぁーーーー！！！！！」
大声で怒鳴った先生…
「ホッホッホ。ワタクシ～はこれにてさら～ばでゴザル～」
おい、ホントにインチキだな。
最後に日本の文化盗んで行きやがったぞ。
教室から一目散に逃げていった。
「なんだったんだ……アイツ…」
みんな俺のことなど目もくれず、席についた。
なんだかんだと言って、俺助かったじゃん！
いつの間にか後ろには、ミクが来ていた。

その後は、不審者が現れたときの対処法を学ぶため、全校集会が行われた。
めんどくさいとは思ったが、ミクとのことがばれるよりマシだ。
それにアイツ（マイケル）のおかげで若干、助かったしな。
今日も一日が終わり、光と一緒に帰る。
「なぁお前、俺のこと…」
「ゴメンっ！誤るから許してっ！」
先に手を打たれた。
「……うん」
すげぇ思い空気だ……
・　・　・　・

・・・・・・・・・

「じゃあな」

すっげー気まずかった。

別れ道に、こんなにも喜びを感じるとは…

「あ…今日は俺、お前ん家行くのやめとくよ」

「よろこんで」

そりゃ君も来づらいでしょうね。

しかし、こっちにもそれ以上に来てほしくない理由があるのだよ。

「ん、じゃあな」

光と別れた。

あぁ…今日は凛と喋ってないな…

それどころか、光ともまともに喋ってないんじゃないのか？

まぁばれなかっただけよしとしよう。

家へ着いた。

ん？灯が点いていない。ミクいないんじゃないか？

「ただいま…」

シ～ン

「いないじゃん」

家の隅々まで探したが、見当たらない。

まさか、変な人に捕まったり？

だが、あんなガキ捕まえてもねぇ…

いや、万が一と言うこともあり得る。

「ぷっ」

何真剣に考えてるんだ俺は……

あんなやつ、いなくなっても別に……よくない。
アイツのおかげで、飯とか作ってもらえてるしなぁ。
でもそんな理由じゃ馬鹿みたいだし、一応俺がめんどうを見る役になってる（気がする）から、探したほうがいいって理由はどうだ？
しかし探しに行ってどうもなかったら、俺馬鹿じゃんか。
どうするべきかなぁ…
ふと、ミクの笑顔が頭を過ぎる。
……
……あぁ、もう！
家を飛び出す。
俺、相当馬鹿だ。俺のおせっかいめ！
「あ、帰ってたの！？」
ぶはっ…
まさか玄関を飛び出て即、会うとは…
「ゴメン、もうお前のことは心配しない」
あぁ…ストレート投げてくると見せかけて、変化球が実は来る、と思ったが裏の裏をかいて、ストレートを投げてくると想定してバットを振ったら、変化球で合ってて、空振り三振した感じの気分だ。
（まったく意味が分からないかも知れないが、なんとか理解してくれ）
「もしかして、心配してくれてたの！？」
一応、ガキのお守りってことでな…
「なんて優しい人なの！？胸が高鳴る、どきどきする。そう、これこそが恋…恋なのねー！？」
やめてほしい…
「お前、演劇部か？」
「違うわよ。なんで？」
もういい……
家へ入り、テレビをつける。
ニュースが始まるところだった。

「こんにちは、視聴率が低いニュースです」
認めてるんだ……
「速報です。今日午前、都内の学校に不法侵入した、マイケル＝インチキ容疑者が捕まったとのことです。彼は、インチキな日本語で、事情聴取を受け答えてます。」
「ぶ……捕まったのかよ」
夕飯の準備をしていたミクがこちらを見る。
「あぁ、朝いた人？」
「そう」
マイケルどうなったんだろう…
「以上で、視聴率が低いニュースを終わります」
は？
？？？？
「ってこらー！今始まったばっかじゃねーか！」
わけわかんねぇよ。
「短気な男ねぇ。光る箱に向かって怒鳴っても、仕方ないじゃない」
「こんな番組許されるのか？」
はぁっと、ため息をつき俺の前に来る。
「いい？番組がやってたら、成り立ってるの。それでいいの。」
ダメだろ。
夕食を食べようと、椅子に座りながらふと思った。
「ところで、なんでお前が飯を作ってくれてるんだ？」
俺が無理に押し付けたわけでもないし、そんな趣味もない。
「何言ってるの？ペットに餌をやるのは当たり前じゃない」
何様だてめー。
「お前はここの家の主が誰か、分かってるのか？」
は～！？と言って詰め寄ってきた。
「あたしよ、あ・た・し！」
死ね。
勝手に上がりこんで、居候してるくせに…

「だからあんたは、あたしの犬。黙ってここにいればいいの」
あ～そうかいそうかい。俺は犬かい。
お前の意見はすべて無視しよう。
さっさと飯を食べ終えて、二階へ上がっていく。
「あたしがいないからって、１人で変なことしちゃだめよー！」
「誰がするか！」
つくづく可愛げのないやつめ…
でも、ミクが来てから少しは家が楽しいな。
そういやアイツ、学校ではほとんどみないな…
当たり前か。この二日間、寝て、全校集会をしただけだ。
明日は、普通の学校生活が送れるといいな…
ほんとに。

お泊り高校、朝～昼

「うそだ……きっと悪い夢だ…」
地面に突っ伏す俺。
「はぁ～？何喋ってるんだよ。さっさとこれ運ぶの手伝え！」
光が手に持った、折りたたみのテントを渡してきた。
きっと読者の皆様には、理解不能だろう。
話は今朝にさかのぼる。

今朝――
ルルルルルルル
朝っぱらから誰だよ。
「はい、神野です」
「あ、神野君かね。鶴山だが」
なぜ朝から、醜いハゲの声を聞かなければならない。
受話器を下ろそうとする手を、全力で阻止する。
「なんですか」
こんな時間に電話がかかってきたということもあり、非常に最悪な予感がする。
「いきなりなんだが、校長先生が『今日は私の人生経験を話そう。学校に泊り込む準備をして来てくれ』と言ってな。臨時で学校に泊まることになった」
校長の声はそんな声ではない。
気持ち悪い声色を使わないでくれ。
「そんな、急に無理です」
「持ち物は、入浴に必要なものと着替えのみでいい。飯はみんなで作るから」
シカトかよ。

「入浴ってどこでするんですか」
「ちなみに、参加しない人は今のところいない。もしいた場合は、成績に大きく反映させてもらう」
（会話は成り立っています）
「な…それはひどいと思いますよ」
「校長先生は時間に厳しいからな。１０時までには来てくれよ」
（会話は成り立っています）
「それにはみんな了承しているんですか？」
「……」
（会話は成り立っています）
「では、早く来て準備を手伝ってくれ」
「ちょっと待…」
ガチャ、ツーツーツー
おいコラ……
「使途ー！どうしたの？」
お・ま・え・の・し・わ・ざ・か
「ぎゃー使途が怖いよー！まさに子供を狙う犯罪者の目！これからあたしは何をされちゃ……」
「何もせんわ！」
お泊り保育ならぬ、お泊り高校などあってはならんだろ……――

「はぁ……」
俺は昨日、＜明日は普通の学校生活が送れるといいな＞と望んだ。しかしミクはあろうことか、＜学校でお泊りがしたい＞と望んだらしい。
俺の望みのほうが、ミクよりも弱かったというのか……
「おい！早く運べって！」
ん？
「なぁ光。急に学校に泊まるなんて、変だと思わないか？」

そうだ、きっとみんなだって嫌だと思って……
「いいじゃん。楽しそうだし」
ナ〜〜〜イ。
「ゴメン。俺が馬鹿だった」
仕方なく荷物を運ぶのを手伝う。
「お前、今日も頭おかしいか？」
真剣な顔で、腹の立つことを言ってきやがって……
「言っておくが、俺がおかしいのではない。俺以外がおかしいんだ」
光の周りにクエスチョンマークが飛び交う。
「保健室連れてってやろうか？」
「お前の秘密ばらしてやろうか？」
一瞬で黙った。
これは中々使えそうだな。
テントをすべて運び終えると、ちょうど昼ごろだった。
ピンポンパンポン
「作業を一旦終了し、体育館に集合してください」
アナウンスが流れる。
俺達は体育館へと向かう。
「昼飯なんだろうな〜？」
「どうせ中学ん時みたいな給食だろ」
体育館に着いた……いや、体育館じゃないかも……
「おおおおお！」
海鮮料理、黒毛和牛のステーキ、お寿司、フランス料理、その他多数の、莫大な費用をかけたと思われる料理が、ずらりとテーブルに並んでいた。
「うわぁ〜おいしそうだね！」
「うんっ！」
向こうのほうで、凛とミクと海野が仲良く話している。
おいおい、ここは公立高校だぜ。
ミク、お前は校長がこれからどれだけ辛い思いをするか、まったく

分かっていないだろう。
「おい、これすげぇな……」
確かにすごいが、変だと感じないお前らのほうがすごいぞ。
「どうした？嬉しくないのか？」
「おかしいと思わないのか？」
俺の話を最後まで聞かずに、我こそにと食を求めて走っていった。
「まぁいい。俺は知らん！」
どうせなら少しでも多く堪能して、校長の辛さを減らしてやろう。
「ん～美味だな」
いろいろと食べ歩いていると、声をかけられた。
「あら、使途1人？そっか、彼女いないし仕方ないよね～」
もっと違う言葉をかけてほしかった。
「そういうお前はどうなんだ？」
凛は1人で俺の横に立っている。
「雫とミクちゃんは2人で楽しんでるからっ」
「花園と仲良くなるの、早過ぎないか？」
「誰かさんのほうが早いんじゃない？」
皮肉を言いながらステーキを皿に取っている。
「ぁーそうそう。こないだの続きだけど…」
「ちょっ、ちょっとステーキ取りすぎなんじゃないかっ？」
何とか話題をそらさねば…
「どうしよ～あんまり食べると太るしなぁ…でも今日くらい…」
コイツもそういうことは気にするんだ。
考えた挙句、凛はステーキ一枚だけを戻した。
「っで、あんたは……」
「おお！あれは俺の大好物の切干大根じゃないかっ！」
向こうのテーブルを指差す。
おいおい、もっとまともな言い訳は思いつかなかったのか。
俺のばかやろぉ～
というか切干大根だけ、場違いなような気が……

「あんたって、切干大根好きだったっけ？」
「ぉ、おう！大好きだ！」
嫌いではないぞ。しかし好きでもない。
「う～ん。最高！これはきっと最高の大根を使ってるな！」
「ふ～ん」
探るような目で見つめてくる。
そんなに見つめないでほしい。恥ずかしいじゃないか。
「おいしいぞ！うん！」
バクバクと食べる…が、さすがにこればっかじゃ嫌だ…
「せっかくこれだけ料理あるんだし、他のも食べよ？」
「おう」
凛と一緒に色んなところを回る。
ちょっと待てよ。もしかしてこれは、他から見れば……カップルなんじゃないか！？
ぉおお！この上ない嬉しさ。人生始まって以来の彼女（仮）…しかも凛！
「さっきから言おうと思ってるんだけどさ、」
「昼食の時間って何時までだっけ！？」
凛よりも大きな声で切り返す。
「知らないわよ。」
く……何か話さなければ…
「あんた、さっきからなんか変じゃない？私の質問遮るし…」
「そんなことは無い」
あ～！何か、何か…何か！
「じゃあ私の質問聞いてね」
むぐぐぐぐぐ…
「……うん」
しまった…次は何とかして言い逃れる方法を…
「好きな人いるの？」
いきなり核心！？（そりゃそうだろうが…）

どう答えるのがいいか……
「……うん」
俺のヴァ～～～～カ！！！
ここでいないって言えば終わったんじゃねーか！
「そっか」
……あれ？
終わりっ！？
呆気ない。
でも助かった。
なんか凛が寂しそうな顔をしてるが、なんでだ？
まぁいいか。
いろんな物を食べ歩いて、凛と楽しく会話できる。
それだけで満足だ。
ピンポンパンポン
「2時までに、昼食を終えてください。また、6時までに与えられた仕事をすべて終わらせるようにしてください。」
時計の針は、1時半をさしている。
「私、行くねっ」
「おう」
あぁーあ、行っちまったよ。
「こらこら、なぜ君はあんなにも積極的に話しかけているのかな？」
「お前現れ方が唐突すぎ…」
光が隣に立つ。
さっきまでの雰囲気がぱぁだ。
「そりゃ唐突にもなるさ！お前がいなかったせいで俺は1人で歩き回ったんだぞ！」
「先にいなくなったのはお前だろう」
簡潔かつ、効果的な反論だ。
「そんなことは関係ないっ！使途が仲良く喋ってるのを見て、影で見失わないようにしながら食事を取ることが、どれほど惨めなこと

か分かるか！？」
「それは切ないな」
ホントに痛い子だ。
「罰としてテント運びはお前に頼む！」
それが狙いか…
「構わないが、お前は何をするんだ？」
ふっふっふと、うざい声を出す光。
「なんと、雫様と楽しくデートすることになったんだよ！」
お前もさっきの食事、堪能してたんじゃないか。
「ということでよろしくっ！」
走り去っていきやがった。
なんとも自分勝手なやつだな。
しかし光は大切なことを忘れているぞ。
テント運びはもう終わったんだよ。
午後からは俺もフリーかぁ。
「神野くーん！」
その呼び方はやめてほしい。
「なんだ花園さん」
「ミクでいいよーっ！昼から暇ならA組の教室来て！」
「昼からは暇じゃ…」
走っていった…
おい…どいつもこいつも自己中だなぁ…
ミクのところに行くのは怖いし…
あぁ…どうか、午後からも何事もありませんように…

お泊り高校、昼～夜

自分の足がすごく重い…
階段の一段一段を、時間をかけて登る。
「あ～やっと来た！使徒ったら遅いっ！」
とうとう着いてしまったよ。もう覚悟を決めよう。
「何か用？」
静まり返った校舎内。
人影はまったくない。
「別に用とかはないんだけどさぁ～…」
なら呼ぶな。
「俺戻るぞ」
「ダメっ」
用あるのかよ…不安が募る。
「使徒、あたしのこと知りたいでしょ？」
「全然」
まさかそんな返事は返ってこないと思ってたらしいな。
きょとーんとしてるよ。
「親不明、身元不明、その他不明多数、の不法侵入者を易々と居候させていいの？」
別に俺には関係ないんじゃないか？
「俺が気になるのは、年齢だけだが」
「だから高校生1年生だって！」
はぁ……思わずため息が漏れる。
「そんな嘘が通るとでも思っているのか？」
「嘘じゃないってばっ！」
目をこすり、自分の目は大丈夫か確認する。
「あたし、ずっと子供のままでいたいって思ったら、そうなっちゃっただけだもん」

信じるか信じまいか……
確かに、ませたガキだとは思うがな。
もしここで認めてしまったら…いっしょに住んでいる俺の立場が危ういい。
「……そんだけ？」
「それだけって言ったら、それだけだけど……」
「じゃあ俺行くわ」
すぐさま逃げさる。
「ねぇ…」
教室の出口、一歩手前で呼び止められた…
おしい……
「何だ？」
「ホントに何も知らなくていいの？どこの誰かも知らないまま居候させたら、不安じゃないの？」
ったく…くどいなぁ。
「お前はお前。俺の飯作ってくれるからそれで良し」
では、これにてさらばっ。
「そっか…ありがとう……」
？
あぁ、今まで親に苦しめられて、居場所がなかったんだもんな。
俺もその気持ちは良く分かる。
そうだ。俺もミクの気持ちが良く分かるから、家に来てから何もいわなかったんだ。
「どういたしまして」
教室からだいぶ離れた場所でボソッとつぶやいた。

あぁ、緊張する…

どうしよ～。うまく話せるかなぁ……
「ぁ、千葉君！遅れてすみません。待ちましたか？」
あなたのためなら、千年でも、一億年でも待ち続けますよ。
「いや、今来たところだよ」
「そうですか。では、行きましょうか」
肩を並べて歩く…なんとも晴れがましい光景だ。
でも、これから何をするんだろう。
昼から付き合ってもらえませんか？としか聞いてないし…
「着きましたよ」
ここは……木材置き場？
「グランドの真ん中まで、運んでくださいね」
笑顔で頼まれるものを断っては、男じゃないぜ！
「はい。任せてっ！」
よっしゃー！いいところ見せるぞ！
「お願いします。じゃあ、あたしは人集めてきますね」
へ…？
走り去っていく彼女の背中を見つめながら、吹き行く風に追い討ちをかけられたように感じた。

何事も無く、教室から抜け出せてホッとした気分。
よかった、よかった。
「あ、使徒君っ！ちょうど良かった」
あれ？
海野って光とデートじゃなかったっけ？
「どうしたの？」
「夜、キャンプファイアーをやるそうなので、木材を運ぶのを手伝ってもらえませんか？」

かまわないが……
「いいよ。光は…？」
海野は、なぁんだ、という顔をしている。
「千葉君から聞いてたんですね。一足先に木材を運ぶのを、手伝ってくれていますよ」
光も馬鹿だな。
この屈託のない美しい笑顔にだまされて、まんまとひっかかったというわけか。
「なら、俺も手伝います」
「ありがとう。あたしもっと人集めてきますねっ！」
あとで光を笑い飛ばしてやろう。
木材置き場に着くと、その部分だけが雨でも降っているのか、と思わせるくらいのブルーな雰囲気が漂っていた。
原因は……光か。
「おい、光…？」
「使徒ぉ……」
お前、光なんだから暗くなっちゃダメだろ。
笑い飛ばすつもりだったが、急遽変更となった。
「どうしたんだ？」
「木材運んでほしかっただけだって……」
うん知ってる。さっき聞いたよ。
「そう気にするなって！デートだと早とちりしたお前が悪いっ！」
「それ、励ましてるつもりか……？」
より一層、空気が沈んだ。
「気を取り直して運ぼうぜっ」
光は重い足をゆっくりと踏み出した。
息苦しい空気の中、運んでいる途中で、たくさんの男子が木材置き場へ走っていった。
きっとあいつ等も屈託のない笑みに、断りきれなかったんだろうなぁ。

「そんなに辛い？」
「あぁ、半端ないよ」
…会話が続かない。
もう6月だというのに雨はまったく降らないが、俺らの周りだけ土砂降りだ。
「ここら辺でいいのか？」
校庭の真ん中には、まだ何も準備されていなかった。
「お～い、君達！ここ、ここ」
体育の顧問の北山先生が、呼んでいる。
「骨組みは先生がやっとくから、どんどん運んでくれ」
先生は光のほうをチラチラと、気にしている。
「分かりました」
かったるいな…
「千葉、お前気分でも悪いのか？気分悪かったら休めよ？」
さっと俺が光の前に割り込む。
「簡単に説明すると、光は今、車にはねられそうになったところを危機一髪で避けたにもかかわらず、車の陰にいた自転車に気づかずにはねられた、というようなところです。気にしないでください。」
愛想笑いを浮かべ、立ち去る。
北山先生は優しいけど、こういう顔色は空気読んでそっとしとくべきだよ。
「あぁ～めんど…」
2、3本運んだところで、キャンプファイアーの土台が完成した。
時計を見ると、もう4時過ぎだった。
「なぁ、そろそろ喋ろうよ？」
あれから光は一言も話さない。
どれだけ俺が1人で話かけ続けたことか。
「うん」
それは喋ったとは言わない。
うん、あぁ、はぁ、としか反応がないぞ。

「手伝ってくれてありがとう！」
先生の言葉と同時に、みな解散する。
「これからどうする？」
「みんな飯作ってるから手伝う…」
まともな返事が約2時間ぶりに返ってきたぞ。
「じゃあ行くか」
校内へと向かう。
「なぁ、俺これからやっていけるかなぁ…」
おいおい。これから自殺するかのような発言はやめてくれよ。
「今日はたまたま勘違いしただけだって。大丈夫」
虚ろな目に、少しだけ光が戻ってきた。
「そうか。頑張るよ」
校内はさっきとは違って、人の声が聞こえた。
調理室は……どこだっけ？
匂いをたどっていく。
なんとも原始的だが、この際なんだっていい。
「これは定番のカレーじゃないか？」
調理室の前には女子が溜まっていた。
「あーダメダメ！女子が真心込めてカレー作ってるから！」
「男子は禁止と？」
みな頷く。
「っちぇー」
「あ、千葉君！」
帰ろうとしたとき、海野が光を呼んだ。
「手伝ってくれてありがとう。さっき作ったんだけど、よかったら食べて」
それだけ言うと、海野は調理室へ戻っていった。
「なんだ、それ？」
「分からないけど…やったぁー！」
喜びのあまり、廊下を走っていってしまった。

「俺を忘れてくなよ」
すげー単純なやつだな。
でも元に戻ったからいいか。
校門には、光が袋包みを開けていた。
「クッキーだ！」
「よかったじゃん」
光は一口食べて、涙を流した。
「まずいのか？」
首を横に振っている。
たとえまずかったとしても、まずいなどとは言わないだろうな。
「うぅ……頑張ってよかった…」
あぁ、ほんとにお前が元に戻ってよかったよ。
その後は、光と好きなやつについて語り合った。
ふと気づくと、空は真っ暗になっていた。
カレーを食いに行こうと思い、また調理室へ向かう。
「な……」
俺たちが調理室についたころには人がほとんどいなかった。
そして、カレーも見事に無くなっていた。
「俺達の分は…？」
「あんた達、来るの遅いのよ。もう全部無くなっちゃったわ」
昼間と同様、ミクと凛と海野が並んで座っている。
「今って……7時！？」
光がおかしな声をだす。
「俺らはどうすればいいんだよ…」
さっきまでの光の気持ちが少し分かった気がした。
「ぷっ……」
ん？
「ぷはははっ！」
ミクが笑い始めた。
「あ～もう、ミクちゃん！早過ぎっ！」

「だって、おかしすぎだもんっ」
何が？
「でも、あんまりいじめると可哀想ですよ」
さすがだ、海野。
光は海野の言葉にだけ、反応する。
「何が可哀想なの？まぁ確かに俺らは……」
「あんた達のカレーはちゃんとあるって！」
後ろにはカレーが2つ置かれていた。
「おー！凛よ、ありがとう！」
「これを機にして、敬いたまえ」
腹が立つが、そんなことどうだっていい。
「ほらほら！あたしが食べさせてあげる。あ～んして！」
ミク…ここは学校だ…
「遠慮しとくよ」
「千葉君、大丈夫？」
光が鼻をすすっている。
「ありがとう、ありがとう、ありがとう……」
ばっとカレーを手にすると、最速で食べ終わった。
相当腹が減っていたのか？
「は、早いね」
「みんなの気持ちは受け取ったぜ！」
何コイツ。
俺もカレーを食った。
「うまいっ！」
ただ豪華なだけだった昼飯よりうまい。
晩飯を食い終わるのと同時に、アナウンスが流れた。
「キャンプファイアーをするので、8時半までに外に出てください」
五人で外へと向かう。
やっぱ華があるといいねぇ…
外に出ると、空には満天の星が輝いていた。

お泊り高校、夜

「うっわーすっげぇ～」
燃え盛る炎。
満天の星空の下、赤い揺らめきに心を魅了される。
「でも、6月にキャンプファイアーやっても暑いわ」
ミク、気分を壊さないでくれ。
「きれいだからいいじゃんっ！」
ナイスフォローだ。
「きれいというより、盛り上がりますね」
「みんな盛り上がりすぎて、うるさいよ…」
そのとおりだな。
「夜にこんなことやって迷惑にならないのか？」
「いいじゃん！楽しいし！」
忘れていたが、お前が望んだんだよな。
「そそっ。楽しもうよっ」
さっきまで5人だったが、盛り上がるにつれてはぐれてしまった。
「ミクちゃん楽しそうだね」
ミクはいろんな人のところを回って楽しんでいる。
写真の撮影に入ったり、雑談したりと満喫しているようだ。
「凛はどっか行かないのか？」
地面に腰を下ろしながら聞く。
「あんたが1人になるとかわいそうだから、私がいてあげるわよ！ありがたく思いなさいっ」
俺の隣に、いっしょになってちょこんと座る。
ホント心から感謝だよ。
「海野と光は？」
「さぁ…2人で楽しんでるんじゃない？」
周りをキョロキョロと見渡す。

「海野って好きな人いるのか？」
「いるって言ってたよ…なんでっ？」
何でといわれても…
「いや、まぁ色々」
適当にはぐらかす。
「ふ～ん」
物寂しそうな顔をして、炎を見つめている。
炎のせいでそう見えるのだろうか。
「炎見つめ続けると、目痛くならないか？」
「なる……」
じゃあ目そらせよっ！
というか、泣いてるじゃないか。
「お…おいっ。どしたっ？」
「目痛くなっただけ……」
嘘つけ……
凛は、顔を膝にうずくめて泣いている。
「え……ぁ……ゴメン…俺……」
「何で、あんたが、誤るのよ……目痛く、なっただけだって…」
言葉が途切れ途切れだ…真剣に泣いてるよ。
周りは賑やかなのに、俺達の周りだけ世界が違う気がする。
普通なら、うるさくて落ち着かないはずだが、心は静まり返っている。
一分、一秒がゆっくりと過ぎていく。
どういうことを言ったらいいのか分からないまま、会話をしようと考える。
「なぁ、なんでも願いが叶ったらどう思う？」
言葉が口からこぼれた。
こんなことは言うつもりなかったんだけどなぁ…
「え…そりゃ、嬉しいんじゃない？」
「でも恋の願いは叶っても、心から愛し続けてなかったらすぐ途切

れるから、願っちゃダメなんだ」
空を見上げていると、次から次へと口から言葉が溢れ出す。
「自分が、ホントに好きだって思い続けなきゃダメなんだ」
凛の泣き声が少し止まった。
「でも、今すぐに触れたい、手に入れたい、愛し合いたいと思ってしまう…そう思うのを必死にこらえるのはつらいけど、きっといつか本当の願いが叶う」
「どういうこと？」
赤くなった目と、目が合う。
「簡単に手に入るものなんて意味ないんだ。苦難を乗り越えて、辛い思いをして手に入れたものにしか、意味は宿ってないんだ」
ちょっとは…意味分かってくれたかな。
「凛を励まそっかなぁとか思って……」
頭をかいて、今度は俺がうつむく。
恥ずかしい…何言ってんだ俺…
「ありがとう」
その言葉は、とても短くて、とても丁寧で、目の前で燃え滾っている荒々しい炎とは違い、とても優しかった。
しかし、凛は横で泣き続けていた。
「え…ゴメン…俺余計なこと言ったかな？」
カァーっと恥ずかしくなってくる。
顔が赤面する。
「違うよ。ただ、使徒の言葉が、私の心…見透かしてるみたいで……分かってくれてるみたいで……嬉しくて…」
なんにしても泣かせてしまった…
悪いことしたなぁ。
「泣くなよ！」
頭を手で強くなでると、すぐに泣き止んだ。
「泣かないよ…」
もちろん、彼女なんて出来たことのない俺には女の子の頭をなでる

なんて初めてで、恥ずかしかったが、それ以上に凛に泣いてほしくなかった。
「せっかくにぎわってるんだから、騒ごうぜ！」
俺達の世界が周りに溶け込んでいくのが分かった。
もう少し、２人だけの世界にいてもよかったかな。
「そうそう！こないだねぇー……」
楽しい時間が、刻々と流れる。
ピンポンパンポン
「１０時から、入浴の時間です。Ａ組からすみやかに入ってください」
入浴って…どこで？
「なぁ、風呂ってどこにあるの？」
校舎内にあるなんてことはないよな。
「なんか、学校の近くにできたらしいよ」
へ～……って、ミクはどれだけ費用をかけさせているんだ…
「そうなんだ。じゃあ、またな」
「風呂覗いちゃダメよっ！」
なっ…
「の、覗かねーよっ！」
俺は逃げるように立ち去った。
「ばーか」
教室へ行き、着替えを持って風呂へ向かう。
お、佐藤がいいところに。
「なぁなぁ、風呂ってどこにあるんだ？」
「学校の近くに出来たって聞いたんだけど……」
分からないらしいな。
「風呂の場所知ってるやついるか！？」
佐藤がみんなに聞く。
「あぁ、学校の隣だよ」
隣！？

「だそうだ」
だそうだ、で片付ける君はすごいよ。
学校の隣って……空き地じゃなかったか？
「ありがと、先行くわ」
よく意味の分からないまま、風呂へと向かう。
「あ～今日は疲れたな…ゆっくりと入るかぁ」
風呂に着いたが、まだ誰も来ていないようだ。
別に、先に入っても構わないだろう。
ガラガラガラ
「いらっしゃい。今日予約の学校の子かね？」
優しそうなおじいさんだ。
「はい。そうです」
「来た人から入れてください、と頼まれたからね。入って入って」
脱衣所に入ったが、やはり誰もいない。
言うまでもないが、男女の脱衣所を間違えるといったよくある漫画風のことは起こらないように、暖簾はきちんと確認した。
「お～」
思わず息を呑む。
すごい広さだな…
ライオンの像の口から、お湯が溢れ出ていた。
浴槽は一つしかないが、十分すぎる。
湯船に漬かった。
「ぁ～疲れとれる～…」
こんな風呂を貸切だなんて、すごく嬉しい。
ガラガラガラ
人がきた。
もう少し1人で堪能したかったが仕方ない。
「ぉお～！すっげぇ」
あの声は光か。
「っよ」

光がガックリとした。
「せっかく一番だと思ったのによ」
「まぁいいじゃん。早く入れよ」
光も浴槽の中に漬かる。
「あぁ…極楽…」
天国にでも来たような顔だ。
「光ってさっき、どこにいたんだ？」
カチン……光が固まった。
「おーい…おーい……大丈夫かー」
聞こえてないな。
「それにしても、ここすげー広いよなぁ」
「おう。こんな風呂、初めて入ったぜ」
そこには反応するのか。
「でさ、お前さっき…」
カチン……おい、お前どうしたんだ？
「しかし、フットバスとかが無いってのが惜しいな」
「こんだけの風呂があれば、贅沢はいえないよ」
お前は何なんだ。
「ところで、」
カチン……
「おいっ！お前なんかあったか！？」
……沈黙を守ってる。
「おーい……」
まさか……
「もしかして、海野に好きな人い……」
「ぎゃあああーーー！！！」
バッシャーン
浴槽の湯を、勢いよく跳ね上げさせる。
「だーいじょーぶかー？」
憐れみの表情で同情する。

「彼女に好きな人がいた……彼女は好きな人がいた……彼女は好きな人がいる…」
微妙な変化はつけなくていいよ。
「そうマイナス思考はやめろって。もしかしたらお前のこと好きかもしれないぞ？」
「絶対無い」
「分かってる」
励ますつもりが、余計悪化させてしまったな。
「まぁ大丈夫だ。なんとかなるさ」
「何がなるんだよ……」
そうだな…自分の発言に責任を持ってなさすぎた。
「大丈夫だ。お前が片思いのままで終わるのは、初めからわかっていたことだ。」
「サバサバ言ってくれるじゃないか…」
ガラガラガラ
今度は人がいっぱい来たぞ。
「くよくよするな！ダチ来るんだからしゃきっとしろっ！」
ふぅーーーっと、長くて重々しいため息をついたあと、元の光にもどった。
「ここのお風呂って広いのかなぁ？」
「体洗えればいいんじゃない？汗かいたし」
近くで女子の声がするぞ…
なんか嫌な予感……
ガラガラガラ
「うっわーひっろーい！」
この風呂には二つ扉があったようだ。
俺達の入ってきた扉と、もう一つ右側に……
「すげぇ！こりゃ楽園だぜ！」
その二つが同時に開いて、みな一斉に中へ入ってきた。
俺達2人は両方を、残りの二箇所は見合わせて唖然としていた。

「っき……っき…きゃーー！！！！！！！！」
やっぱこういうオチかよ…
「光！早く戻るぞ！洗面器が当たったら痛さは半端ねぇ！」
光の手を握って、ダッシュで元来た脱衣所に戻る。
俺らはセーフ……っというか、なんで混浴なんだ…
「使徒ぉぉおお！お前、それでも男か！？」
あぁ、正当な男だ。
「男なら痛さを我慢し、苦難に立ち向かい、栄光を手に入れるんじゃないのか！？」
「やめたほうがいいぞ」
俺の言葉など届くはずもなく、無謀にも洗面器の飛び交う風呂に入っていった。
あれは男と呼ぶべきか？
ただの変態なんじゃないのか？
俺は男じゃないのか？
周りを見渡すと、男子は誰一人としていなかった…

「あ～！もぅ…」
女子達は顔を真っ赤にして、男子達は（俺を除く）顔を真っ青にして、銭湯ならぬ戦闘を後にした。
「男ってみんなあーなの！？」
ミクが愚痴をこぼしている。
「使徒君は違いましたよ」
さっすが海野、いいところに目をつけている。
「俺はコイツと違って馬鹿じゃないしっ」
「るっさい…」
かなりへこんでるな…
「神野さんはいい人なんですね」
作り笑いやめろ…

「さすがあたしの犬……」
おい！何か言ったか？言ったのか！？
「え！？」
何！？
まさか……聞かれた？
「どうした…？」
恐る恐る聞いてみる。
「バスタオル忘れてきちゃった…」
なんだ…そんなことか。
びっくりするじゃないか。
「明日取りに行けばいいじゃん」
光が喋った…
「でも…めんどくさい」
肩を落としてこちらを見た。
訴えかけるような目はやめてくれ…
その目ダメ…負ける……
「あー分かったよ！取りに行けばいいんだろ！」
一回戦敗退。
「ありがとっ！」
でも学校着いちゃったしなぁ。
「使徒君1人じゃ危ないんじゃないですか？」
やっぱ優しいねぇ…
「いや、使徒は1人でもやっていけるやつだ」
うぜーよ。
「近頃は男でも襲われることあるからねぇ…」
「まてまて、お前に命令されたのに、なんで心配されてんだよ」
これならさっさと1人で行ったほうが早く済みそうだ。
「神野さんと、凛ちゃんで行けば？」
お前はペットの世話も見ないのかい？
「凛来るなら1人のほうが安全だ」

「何それっ！？いいわ、私も行くから」
すねちゃったよ。すねる要素なかったと思うんだが…
「お前の身を案じてだぞ？」
「いぃの！」
一度言ったら聞かないってやつか…
「いってらっしゃ～い」
光め……
仕方がなく凛といっしょに、来た道を戻る。
「付き合わせちゃってゴメンね」
「いや、問題ない」
問題ない？
これが高1の会話かよ…
しばらく無言が続く。
銭湯についた。
歩いて2分くらいで着いたぞ。
さっきもっと遠かった気がしたんだけど…
「私とってくるから待ってて」
ガラガラガラ
中へと入っていった。
外は真っ暗だ。
正直少し怖い。
……凛、遅いな。
三分くらいたってる。
「ゴメンゴメン、探すのに手間取っちゃった」
やっと帰ってきた。
すげー怖かったんですけど。
「早く行かないと、みんな寝てるかも」
今度はさっきより早めに歩く。
「使徒、さっきの話なんだけどさぁ…」
さっき？キャンプファイアーの時かな？

「願い事が叶うなら願っちゃダメかもしれないけど、叶わないなら願ってもいいよね？」
え…叶わない望みなんてない俺にはわからない…
「まぁ……いいんじゃない」
歩くペースを少し遅くする。
「じゃあ私は願い続けるねっ」
凛の笑顔には、すべてを頷かせる力があるな。
「頑張れっ！応援してるから」
ちょっと待てよ…
応援していいのかな？
そういや凛の好きな人って誰だろう…
「なぁ、凛…」
あ、もう学校に着いてしまった。
「どこで寝るのかな？」
俺の声は聞こえていなかったみたいだ。
まぁいいか。
「おーい！こっちだこっち」
くっそ…寝る前まで醜いハゲを見なければならないとは…
「なんですか？」
なるべく呼ばないでもらいたい。
「君達来るの遅かったから、みんな寝る準備しちゃったよ。今から行くと迷惑だから、図書室で寝てくれ。じゃあおやすみ」
は…？
「え……」
あのハゲぇぇ…行っちまったよ。
「もしかして…2人？」
体が火照ってきた。
「多分…そう…」
嬉しいような、悲しいような…
神妙な心境で図書室へと向かった。

お泊り学校、深夜～朝

「せまっ！」
確かに……
図書室には、二つの布団が置かれていた。
無駄な観葉植物や、本棚、固定された机などが多いせいで、後ろのせまいところに布団を並べるしかなさそうだ。
「使徒！あんた、私が寝てるからって、変なことしないでよっ！」
顔を真っ赤にして怒鳴りたてている。
「誰がするか！」
さっさと布団を敷き、布団に入りこむ。
本当ならこんな時間に寝たりしないのに…
凛も電気を消し、目を合わせないように反対方向を向いて布団に入った。
ふー…
やっと一日が終わった。
散々だったが、案外楽しかったかもな。
凛と話せたし……ミクに多少感謝。
というか、凛って隣にいるんだよな。
そう思ったとたん、ドキドキし始めた。
シーン
静まり返った夜の図書館は少し怖い。
お化けとか出ないよな…
ぷっ、何考えてんだ。
そんな非科学的なものが、存在するはずなかろう。
でも怖がっている凛を見るのも、悪くないかも…
パッ
突然照明がついた。
「何よ…使徒？」

俺は隣にいる。
「先生じゃない？」
入り口には、誰も立っていない。
パッ
「あれ？消えた…」
月明かりで、うっすらと凛の表情が目に映る。
ミスったな…
お化けが出てきても悪くないなんて、思うんじゃなかった。
凛は本気でビビってるよ。
「夜の図書館で電気がついたり、消えたりって言ったら、お化けじゃない？」
答えを知ってる俺が、聞くのは不思議なもんだ。
「ばっ…ばっかじゃないのっ？幽霊なんて、いるはずな……」
凛の動きが止まり、顔が青ざめてきた。
かと思うと、びくびくと震えた指を俺の肩に向けている。
「何？」
後ろを振り返った…何もない。
「い、今…」
「お化けがいたなんて言うんじゃないよな？」
凛は必死に首を縦に振っている。
「そんなはずないじゃん」
凛の表情が、あまりにも真剣だ。
「今日は電気工事でもやってんじゃない？俺寝るからな」
顔がにやけてくるのを必死に我慢し、布団の中で息を殺して笑う。
凛は今、どんな心境なんだろう。
きっと、恐怖と絶望に満ちた顔をしてるんだろうな。
「ちょ、ちょっと使徒！」
俺って性格悪っ。
凛を無視して、寝るふりをする。
「使徒ったら！」

俺の体を揺さぶってきた。
「俺は寝る！さっさと寝ろよ」
うっとうしそうにして、布団を深くかぶりなおす。
「幽霊見たのに寝れるわけないじゃん！」
いつに無く真剣だな。
心の中で密かに笑う。
「ちょっと、使徒ぉ…」
だんだん声が小さくなってきた。
泣いたりしないよな。
トントン、と俺の体を叩く。
「ったく、なんだよ！」
布団を跳ね除け、起き上がる。
凛は、図書室の奥のほうにある青白い光を指差している。
指の先をたどっていく……
「う……わ…」
気が動転し、声が出ない。
「あ……あれ……さっきの幽霊…」
凛がさっき見たやつか…
おいおい、俺がお化けを望んだのに、俺が怖気づいていてどうする。
「大丈夫だ。きっと」
そういって、布団にもぐりこんだ。
正直に言おう。
望んだ俺が滅茶苦茶怖い。
多分危害は加えないだろう…が、怖いものは怖い。
だって、『殺すわよ』って目で見つめてくるんだぞ。
「使徒の意気地無し！」
それは……印象悪くしてしまったのか？
「あれは誰だって怖いぞ」
布団の隙間から、凛のほうを見て話しかける。
凛も自分の布団に入り込んだ。

時計の秒針が、カチッカチッと音を鳴らしている。
その音が、怖さを増幅させる。
「ねぇ、使徒」
ん？
「入れてね！」
何っ！？
凛が、突然俺の布団に入ってきた。
「お前！入ってくんな！」
「仕方ないじゃない！怖いんだもん！」
カァーっと、体が熱くなってくる。
「お前が入ってきたら寝れんわ！」
俺の言葉などお構いなしに、隣に寝入る。
「変なとこ触ったら、ぶっ殺すわよ！」
「そんなこと起こっても、お前が悪いだろ！」
本棚の間を見ると、まだ幽霊はいる。
凛の布団にまで移動する勇気はない。
しかし、このままではまずいだろう。
かと言って、方法は浮かばない。
仕方なく大人しくしていることにした。
こんな状況で凛の方を見たら、恥ずかしくて死んでしまう。
凛とは反対方向に体を向ける。
「ちょっと！どこ触ってんのよっ！」
俺は背中を叩かれた。
「いてぇな……不可抗力という言葉を知らないのか？」
「あんたにそんな言葉は必要ないわ！」
ひどいな…
「それより、こんなんじゃ恥ずかしくて寝れないじゃない」
パジャマの背中の部分を握られる。
「だから寝れないって言っただろ！自分のとこ戻れよ」
「無理！怖いじゃんかぁ…」

怯えている声を聞くと、罪悪感を感じる。
「俺に向こうに行けというのか！？」
「それはそれで怖い…」
何なんだよ。
「どっちにしても寝るためには、別々じゃないとダメだろ。俺向こう行くからな」
布団から抜け出して、外に出る。
「うわっ！」
すぐさま布団に戻る。
「何っ！？」
「いた……いた…」
ぎゅっと凛を抱きしめる。
「やっ！ちょっと…」
「布団の周り囲まれてる…」
怖さで体が勝手に動いてしまった。
「ぇ…やだ、ホントに？」
凛も怯えだす。
怖さが少し直ったら、冷静になってきた。
「ごっ…ゴメン…」
すぐさま手を離す。
あーもう！何やってんだよ俺…
あれ？
凛が今度は抱きしめてきた。
「怖いよ……怖い…いやだぁ……もぅ…」
泣いている。
「大丈夫」
頭をポンポンとする。
内心、俺だってたまらなく怖い。
しかし……元はと言えば俺のせいだ。
「大丈夫だから、泣くな」

凛は泣き止まない。
俺、凛を1日に2回も泣かせてしまった…
静かな空間に、すすり泣く声だけが響く。
カチッカチッカチッ
時計の秒針を誰か止めてくれ…
止まった…
「今度は何？」
凛が、さっきよりも強く抱きついてくる。
余計怖がらせてしまったようだ。
シーン……
静まり返った図書室。
これはこれで怖い…
「使徒？寝ちゃったの？」
なんで？
「起きてるよ」
「よかった。話しててくれないと怖い…」
そうか…
でも俺からすれば、話してたほうが怖い。
「私寝るまで寝ないでね」
マジかよ…
「分かった」
何で了承してんだ！？
また沈黙が続く。
「ねぇ、何か話してよ…」
急にそんな…
「何を？」
「何でもいいから」
凛は泣き止んだようだ。
しかし、俺の体からは離れようとしない。
「話すことないじゃん」

心臓がドクドクと、大きく脈打っている。
変な風に思われたらどうしよう。
いやいや、こんなお化けに囲まれた状態で、何を考えているんだ俺は。
「使徒、好きな人だれ？」
「えっ…まぁ…」
急な質問に戸惑いを隠せない。
「だれ？」
後押しされる言葉で、さらに心臓が大きく脈打つ。
「優しい人……」
「答えになってない」
うん…そうだな。
「優しくて、頑張ってて、笑顔が可愛くて、強そうなのに心は弱くて……」
『凛だよ』
そう言えばいいのに…
「それも答えになってないよ…」
勇気が出せなくて…
「そういう凛はどうなの？」
聞きたくないけど、場を和ませるには仕方ない。
「いるけど……秘密っ」
「ずりー」
人のことばっか聞いてくるくせに。
「で、結局誰なの？」
ここでばらすわけにはいかない。
「誰でもいいじゃんっ」
「よくないよ…」
なんでだよっ！
「俺も秘密だって」
……

「どした？」
寝ちまったのか？
隣を見ると、案の定寝ていた。
よくも人が話してる最中に…
まぁいいか。
寝顔が天使みたいだな。
見とれているうちに、いつの間にか俺も寝てしまっていた。

使徒ー！使徒ー！
誰だよ……ぅぅん……あと少しだけ……
眠い……
「起きろー！！！」
「うわっ！？」
ん？
あぁ、そういえば学校だった。
朝一に目に飛び込んでくるのが凛だと、さわやかな朝を迎えられるなぁ…
俺の目にはキラキラと輝いて見えるよ。
「なんか、昨日変な夢見ちゃったー」
夢？
「幽霊がいっぱい出る夢は嫌だなぁ～」
わざとらしいぞ…
まさか昨日、俺に泣きついてきたことを隠蔽する気じゃあるまいな？
「あぁ、俺もそんな夢みたぞ。確か凛が泣いて俺に寄ってきたっけなぁ？」
「ぇ、いやっ違う！そんなことしてない！」
顔を赤らめて言い返すが、分かりやすい反応だ。

「ぷっ。面白っ」
凛は顔を下に向け、目だけ俺の方を見ていじけている。
「大丈夫。誰にも言わねーから」
「絶っっ対だよっ！」
そんなに俺のこと嫌なのか…
「言わない…」
ちょっと落ち込む。
なんにしても俺のせいだし…
「ご飯食べに行こっ」
楽しかったからいいや。
朝食を食べるために、調理室へきた。
誰もいない。
外を見ると、全校生徒が出ている。
「あー外で食べるのかぁ」
「そうみたいだな」
外に出るまで、あまり喋らなかった。
そりゃ昨日あんなことあって、話せるはずないか…
自業自得だが、やっぱり楽しく話したい。
「朝から夫婦仲良く朝食ですか？」
「違っ！そんなんじゃない！」
光…タイミング悪すぎ…
「なんかあった？」
俺にささやく。
「なんもない。ただ、なんか怒ってるな」
光は深く考えることもなく、凛とも普通に会話ができた。
ナイス媒介者だな。
外では、購買部のパンとかおにぎりとかが売っていた。
朝食をさっさと済ませる。
ピンポンパンポン
「みなさん。その場で静かにしてください。校長先生のお話があり

ます」
そうだ！
忘れていたが、校長の話を聞くために泊まりで学校に来たんじゃないか…
なぜ泊まりの必要があったんだ…
「ぇーみなさん！昨日は楽しかったですか？」
かなり楽しかったっす。
「楽しかったならそれでよし。先生はみんなの笑顔によって元気になれます。それが生命源かもしれません」
明日から笑うのは止そうかな。
「人生において、もっとも大切なものを見つけることができるきっかけを与えたかったのです」
それだけのために、あれだけ費用をかけるとは…
すべてミクのせいだが。
「私の言いたいことはそれだけです。ではあとは自由にしてください。帰るもよし、楽しむもよし。では解散！」
あいつは何で泊まらせたんだ？
ミクが悪いんだろう。
しかし、あいつに怒りがいってしまうよ。
は～…っま、楽しかったからいいか。
もうミクのわがままには、付き合いたくないけどな。
快晴の青空の下、お泊り学校が幕を閉じた。

ゲーム（前書き）

遅くなってすいません。
高校入試のため、更新ができませんでした。
無事合格したのでこれからも更新していくつもりです。
しかし忙しくなってくると思うので、更新が遅れることがあると思います。
ご了承ください。
これからも末永くよろしくお願いします。

ゲーム

「ウギャルァ！」
は？
耳を劈くかと思うような音。
「うぉぉおおい！何だこれ！？」
地面は、まさに隕石でも落下したかのように黒く焼け爛れ、大きな穴が開いていた。
いや、隕石だったらまだ理解できるだろう。
「ゴルゥウウウアァァア！」
「うぎゃーー！」
わけの分からないまま逃げる。
「ムァーデェーーー！」
待て…と言っているのか？
というか、待てるか！
「なんなんだよアイツっ！」
俺を追ってきているのは怪物？ケダモノ？そういった部類だろう。
誰か、誰か…
なんで誰もいないんだー！
後方を追いかけてくる悪魔のようなケダモノ。
少し人の形をしているが、人とはかけ離れた存在だ。
四本足で走ってくる。
「ぅぐぅくうがだだあぁぁがぁ！」
何ぃ！？
俺の真上をジャンプで跳び越し、道に立ちはだかる。
「な、何なんだよお前っ！？」
「ぎぇ、デェ、エモォーン！」
殴りかかってきた。
ものすごい音と共に、俺のさっきまでいたところが焼けて、壁が無

惨に砕け散る。
「デーモン？悪魔か！」
そりゃ見るからに悪魔だろうな！
くっそー、俺は悪魔なんて信じねぇ！
しかし今現在、信じるしかない方向へと向かっている…
「ぢね、ぢねぇ！」
あたり一面を殴りまくっている。
俺は運良く、一発も当たることなく避けている。
攻撃が止まった…
「消えろ」
「ウソォ！？」
お前、キャラ一瞬で変わりすぎだろ！
反則だ…インチキだ…
とか思っていると、俺の目の前で息を思いっきり吸い込んでいる。
「げ…やば…」
「ボォオオー！」
直撃だ。

―――ＧＡＭＥＯＶＥＲ―――

―今朝、俺はいつもどおり学校へと向かう予定だった。
それは何も変わらないはずだった。
しかし、俺は馬鹿だった。
今日は土曜日ではないか。
休日ではないか。
ミクと一日、一緒ではないか…
地面に突っ伏す形で倒れこんでいると、ミクが後ろで楽しそうにはしゃいでいた。

その不思議で、いかにも嫌な悪寒のする光景をできるかぎり遠回りをし、自分の部屋へ入って鍵を閉めることを頭の中でシュミレーションしながら朝食を食べ終え、椅子から立ち上がり、第一歩を踏み出した。
「ねえ使徒…」
ダダダダダダダ
ふふふ……さすがに猛烈ダッシュだとはアイツも思っていないだろう。
「もー！レディーの話の途中で走るなんて下品な人ねっ」
俺の部屋に悠々と入ってきやがった。
「あれ？お前なんで？」
「なんで…って、話があるからじゃん」
俺の頭ではシュミレーションしきれていなかったようだ。
部屋には鍵がなかった……屈辱。
「あのね、あたし秘密基地ができたの！使徒も来て！」
そんだけかよ。
「そんなのい……」
俺の話を見事にスルーし、手を引いて一階へ向かわせられた。
「どこにあるんだよ」
「ここ！」
たどり着いたのは廊下。
「なぁ、俺んちに居候するのは構わない。しかしだな、勝手に人の家を改造するのはどうかと思うぞ？」
そこには以前まではなかった扉がある。
「いいから、いいから！」
よくないって。しかもすげー楽しそう。
仕方が無く扉を開ける。
「……夢だ」
「なにそのリアクション！？」
ミクがすごい勢いで怒鳴りつけてくる。

あぁ……俺は夢を見ているんだ。
ドアを開けたらそこは、俺の住んでいる町があった。
「これなんだ？」
「どこでも行けるドア～。なんちって！」
にっこにこのミク。
なんちって…で済むと思っているのだろうか。
「まぁ、ともかく入るよ！」
強引に中へ引きずり込まれた。
「え、ちょっと…」
中…というか外には誰もいない。
「ここでゲームするわよ！」
何喋ってるんだ。
「おいミク、病院連れて行ってや…ボハッ！」
ちくしょー…俺の顔面にジャンピングパンチとは…
「早く始めるわよ！そこのパネルに手を当てて」
ぐぅう…
俺は頬をさすりながら手を当てる。
ウィィィィィィン
すぅ…っと、俺が透明になった。
もうミクのすることに驚けない。
散々だ。
「なんだこれ」
「ここで死んでも生き返れるから安心してっ。体は家に転送されたから。あとこれ」
渡されたのは液晶付きの腕輪？
「これはめといて。死んだらすぐに分かるし何かと便利なの。ともかく先に死んだら負け」
意味が分からない。
死ぬって…
大体こんな町で死ぬことなんて絶対にないだろう。

なんせ人っ子一人見当たらない。
そのおかげで道路には車は走っていないし、電車も止まってるはずだ。
「どういうことだ？」
あきれた顔をされても困る。
「だから、ゲームよゲーム！」
「なんでそんなものに参加しなければならないんだ」
多分休みだから、何か起こるだろうとは思っていた。
しかし、こんな面倒なことじゃなくてもいいんじゃないか？
「あーあ…せっかく勝負に勝ったら犬返上してあげようと思ったのに…」
「やる」
犬はむかつく。
どーせゲームだろう。ガキには勝てる。
「じゃあ決まりね！よーい…スタートっ！」
シュッ
……いや、勝てない…
ミク…消えたぞ？何したんだ？俺は何にもゲームのやりかたしらねぇぞ？
たとえゲーマーでも得体の知れないゲームで、説明書無しに経験者に勝てる可能性は限りなく低い。
俺、どうすればいいんだ…
意味の分からないまま道路を進んだ―

気がついたらスタート地点にいた。
終わりじゃないのかよ…
ふと、腕輪のことを思い出す。

「ライフ×2…？」
さっき死んだから初めは3だったってことか。
まぁいいや。適当に逃げとけばいいだろう。
まずは、ゲームのやり方を覚えないと…
あんな怪物が出てくるんだったら、絶対にたおす術もあるだろう。
まずアイテム収拾が妥当ってとこか。
目に入った家へ入っていく。
リアルゲームは嫌だなぁ…自分で採取しなければいけないなんて。
心の中で愚痴をこぼしながら、転々と家の中を物色する。
5分ほど物色したところで思った。
俺、馬鹿だ。
ここは普通の日常品しか置いてないに決まっているじゃないか。
せいぜい使えるとしたら包丁くらい。
どうせあんな化け物に太刀打ちできないとは思いつつも、気休め程度だと自分を言い聞かせてもらっていった。
人がいないとはいえ、泥棒の気分はいい気分ではない。
不思議な面持ちで家を後にした。

「ふっふ～ン。使徒一回死んじゃったんだぁ」
どことなく楽しそうなミク。
町をゆっくりと歩いている。
後ろからの怪しげな影には気づいていないようだ。
「このゲームホントは勝ち負けじゃないんだけどねっ」
トントン、と肩を叩かれた。
「ん？もう？早すぎない？」
影は首を横に振る。
「ぇー仕方がないなぁー」
ミクは影と共に城の中に入っていった。

その城は真っ黒でいかにも悪魔城というイメージだ。
「頑張ってね、使徒」

はぁ、はぁ、はぁ、
「グビュビュビュドビャビュグチャァ！！！」
「何喋ってんのか意味分かんねぇーっつーの！」
俺はさっき家から出たとたんに、奇襲された。
さっきのデーモンってやつとは違い、小悪魔みたいなやつだ。
悪かった、小悪魔というと可愛いイメージを持ってしまうだろう。
きっと、こうもりのような二つの羽を羽ばたかせながら中を浮いていて、槍のような尻尾が生えているものを想像したに違いない。
あぁ、間違いじゃあないさ。
しかし顔はどうだ？
ゴリラだぜ？
攻撃してくる尻尾をさっきの包丁で切り落とす。
あっぶねーな包丁って。
「ジュルルルルゥァ！！！！！」
痛みの叫びか？
気持ち悪いったらありゃしない。
チャンスと思った俺は一気に切りかかった。
「ドビュビュブュ…」
最期まで意味の分からないことを言いながら消えた。
「っしゃ！たおしたっ！」
ふぅー。
束の間の安堵。
ミクどうしてんだろ？
腕輪を見ると、何も表示されていないぞ。
ミクめ、自分だけ分かるようにしやがったな。

ファンファンファンファンファン
ん？なんだ？パトカー？
「ジュウトウホウイハンデタイホスル」
中からロボットが出てきた。まずい。
「今だけ許せ！」
風を切り裂いて走って逃げる。
すぐさまロボットは車に乗りなおして追いかけてきた。
パトカーは一台だけだ、逃げ切れる。
「トマレ、トマレ」
やなこった！
そうだ！いいことを思い出した。
俺武器とか使わなくても天性の才能があった。
パトカーパンクしろ、パンクしろ、パンクしろ…
「トマラナイナラウツゾ」
ミサイルが飛んできた。
俺に選択の余地ないじゃねーか！
ミサイルは運良く俺をそれて家に当たった。
とてつもない爆音、爆風と共に家が消え去った。
あんなもの当たったら即死だろうな。
パンクしろ、パンクしろ…
「ツギハアテル」
「パンクしろ！」
パンッ！という音がして、パトカーが壁に激突。
少しの間をおいて爆発した。
ここらの住宅があれだけのことで潰れてしまった。
妙な罪悪感。
まぁ命かかってたんだからしょうがないか。
「さて…」
悪魔から逃げてても仕方ない、ミクを探してたおしてやる！

真の目的（前書き）

今まで書いた章を読み直して気づきましたが、使徒が使途になっているところが度々ありました。
すいませんでした。
正確には使徒です。

真の目的

現実の道を手ぶらで軽やかに歩く光。
一昨日は使徒に迷惑かけちまったからなぁ。
どうやらこれから使徒の家へ行くらしい。
「おー。凛じゃん」
休みの日に交差点で出くわすなんて珍しい。
使徒の片思いの相手とは思いつつも、いつも見慣れない私服姿のせいか胸がドキっとした。
「どっかいくの？」
「使徒ん家に」
ふ～んという感じでさらっと流された。
「じゃね」
そういうと彼女はさっさと行ってしまった。
取り残された光。
使徒、あいつのどこがいいんだろう。

「くっそーミクのやつどこにいるんだ」
手にはさっき倒したロボットから奪った銃が握られている。
が、一般人が銃を持つのは逆に危険である。
道路を歩いていると、遠くに一匹のデーモンが見えた。
どうやら初めに出会ったやつのようだ。
すかさず近くの庭に身を潜める。
「ミュウシナッダ」
近くまで歩いてくるとそう言った。
どうやら俺のことを言っているらしい。

「フンガッ！」
「なっ…」
思わず小さな声が漏れた。
ばれてはいないだろうが…驚いた。
あいつは光に包まれたかと思うと、西洋の騎士を思わせるような美男子に変身したのだ。
彼はポケットから何かを取り出すと、耳に当てて会話を始めた。
「申し訳ございませんミク様、見失ってしまいました」
ミク様！？まさかミクと手を組んでやがるのかっ！？
「ま……でも……だからいいわ……ね。……い？」
ミクの声は途切れ途切れにしか聞こえない。
「はい。分かりました」
もっとよく聞こうと近づくと、庭にあったダンボール箱を蹴ってしまった。
「何奴！？」
まずいっ！
「にゃ、……んにゃぁ～」
恥っずかし～～～っ！
「ッフ、ただの犬か」
こいつがただの馬鹿で助かった。
「どうしたの？」
ここならミクの声も届く。
「いや、犬がいたようで…」
「そう、ならそろそろ使徒が来るかもねぇ…」
背筋がびくっとした。
そういえば、ここの町には動物は一匹もいなかった。
心臓が高鳴る。
「どういう意味ですか？」
へ？
「こっちの話よっ。それよりポチ、早く戻ってきてね」

ポ……ポチ……
なんだか同情してしまう。
「分かりました」
ポチが馬鹿で助かった。
通信機を切ると、そいつは歩いていった。
すぐさま気づかれずに追いかける。
サササ…
「ムッ！？」
気づかれたか…？
「ッフ、修行の成果が表れたか、風の声までも聞き取れるようになったようだ」
マントをバっと靡かせて歩き続ける。
アイツは真剣に馬鹿なんじゃないか？
それから気づかれること無く、変てこな城に着いた。
ここにミクが……
「ッフ、やっと到着した。ッフ、足が疲れきってガクガクしよる…」
カッコ悪っ！
「やはり変化は疲れる…しかし、ミク様のご命令だ」
そういい残して中へ入っていった。
そして俺も間をおいて中へ入っていった。

ピンポーーン
返事はない。
ピンポーーーン
返事はない。
ピンポピンポピンポピンピンピンポーーン
連打したが、返事はない。

「あーもう！」
不審者呼ばわりされるのが嫌でチャイムを鳴らしてやったが、出てこないあいつが悪い。
勢いよく扉を開けて中へ入る。
静まりかえった家。
「使徒～……？」
これだけ静まり返った大きな家はなんだか薄気味悪い。
「使徒ー！」
今度は大きな声で呼んだ。
しかし返事は返ってこない。
「っかしーな。あいつ外出なんてほとんどしないのに」
家の中を歩いていると、ふと半開きのドアが目に入った。
この中か？
「コラ使徒！返事くらい……」
思わず息を呑んだ。
キョロキョロと周りを確認した。
「ここって……家の中？」
意味が分からないまま中へと入っていった。

中は何も無かった。
入ると学校の体育館にも似た構造で、ただ広いだけの場所があった。
「ようこそ使徒！」
奥のほうにミクがいる。
「お前何やってんだ？」
口元をゆがめて笑うと、自慢げに言った。
「実はこのゲームね、生き残ったほうが勝ちって言うの嘘っ」
ふざけんなよ、おい。
「あたしねー、一回お姫様やりたかったのよ。というわけで、勇者

が使徒であたしはお姫様っ！」
「ミク！こんなめんどくさいことに付き合わせやがって…」
なんだか怒りがこみ上げてきた。
「勇者様ー！あたしを助けてー！」
茶化した感じで叫んでいる。
こっちの身にもなれってんだ。
「だれが助けるかよ！」
俺はさっさと帰ろうと、ミクに背を向けた。
「そうはいくもんですかっ！いけポチっ！」
姫様よ、勇者と姫は味方だろ？
姫が敵を操ってどうするんだい？
「ッフ、ミク様のご命令ならば！」
こちらへ向かって走ってくる。
「なぁお前」
俺の声に反応してポチの動きが止まった。
俺も背を向けたまま立ち止まる。
手に銃を構えて。
「なんだねボーイ？」
「しんどけ」
即座に振り返って銃を撃った。
しかし、銃がこんなにも使いづらいものだとは思いもしなかった。
弾はポチに当たるどころか、まったく違うほうへ飛んでいき、危険そうな機械に当たった。
「あ…使徒！何すんのよっ！まずいわよ！」
もうもうと立ち込める煙。
「ッフ、ミク様ご安し……」
すさまじい爆発と共にミクと俺はスタートに戻された。

「な……なんだこれは！？」
いきなり目の前で煙が立ち込めた。
するとそこには……
「なんてことすんのよ！このゲーム作るのにどれだけ時間かかったと思ってるの！？」
周りは真っ暗。町のビジョンは瞬く間に無くなった。
どうやら体も元に戻ったみたいだ。
「んなこと知るか！！なんであんなとこにあんな危険なもん置いておくんだよ！」
「まだ敵があんまり出来てなかったからしょうがないでしょ！作ってる最中だったのよ！」
「そもそも人ん家に勝手に基地つくんなよ！」
「人ん家って何よ！あたしん家よ！」
煙が晴れてくると、光がいた。
「ぁ…ぇと…」
「どうした？」
もうミクとは友達ってことになったんだから、遊んでることがばれたくらいどうだっていい。
「お邪魔しましたっ！！」
それだけ言い残して、俺の家をあとにした。
「し、使徒っ！」
まだ何かあるのか。
もうこりごりだ。
「何だ？・・・うわぁー！」
俺とミクは素っ裸。
「どうやら体に自分が戻る時は、体だけこちらにくるようね」
冷静に分析してる場合か！
そうだ！
「光！待て！誤解だ！うぉおお！！！」
もうすでに光の姿は無かった。

休日

「はぁぁぁぁ……」
あの後は散々だった。
光を追いかけて、笑顔のまま受け答えする光を無理やり家へと引き戻し、いろいろと事情（嘘含む）を説明した。
そのときに、
「ぇ！？あたしは使徒の思うままにされてただけよっ！？」
という言葉を、ミクが悪魔のような微笑みを浮かべて言った時には目の前が真っ暗になった。
「使ぃ～徒ぉーっ！」
さっきからミクは隣で体を揺さぶってくる。
（朝になるといつものように隣にミクがいるので、不覚にも慣れてしまったようだ）
こちらの気も知らないで…
「使徒ったらまだ昨日のこと怒ってる？」
俺は反応もせずに、ずっとミクと反対方向を向いて寝ている。
「ねぇ使徒ぉ～…」
なんなんだよ…
「布団の中もぐって変なことしちゃうぞっ？？」
人生喪失させる気か…
「ん～…ダメね…」
そうだそうだ。
だから頼むからどっか行ってくれ。
（俺はミクよりも天性の才能の力が弱いため、ミクには俺の願いは通じない）
あ～神よ、なぜ休日は二日もあるのですか？
この世の創造主、すなわち神は世界を6日間で創り上げ、7日目に休暇をとったから一日だけが休みでいいのではないのでしょうか？

ぐだぐだといろいろなことを考えていて、気づくとミクの姿はなくなっていた。
やっとどこかへ行ったか、と胸を撫で下ろす。
休みの日ぐらい遊ばせろってんだ。
「使徒……」
扉を開けるとそこにはミクが立っていた。
まだ何か用があるのか…
「ごめんなさい…」
「ぇ……っと…」
ミクに何かが起こった！？
そんなに素直に謝られると怒れないじゃねーか。
「ただ、遊んでほしかっただけなの…パパも、ママも、ずっと遊んでくれなくて…」
目に涙を浮かべながら喋っているミクは、小学生のようでこちらがいじめていると錯覚しそうになる。
俺が罪悪感を感じてしまう。
「わかったわかった。許してやるし、これからも度が過ぎなければ遊んでやるからおとなしくしろよ」
そういった途端、涙を浮かべた顔に笑顔が戻った。
「うんっ！」
やっぱり笑顔のミクは可愛い…
いかんいかん！一応親戚で、自称高校生なんだ。
俺には凛がいる！
―付き合えねーだろ―
心の中の自分の本音が自らを打ち砕いた。
「じゃあ今日は昼からお買い物ねっ！凛ちゃんとシズちゃんも誘ってるからっ！」
……
はめられたぁっ！！！

待ち合わせ時刻は１：３０だったが、緊張して３０分も早く着いてしまった。
もちろん緊張というのは光にみられたあの光景……
あいつのことだからどうせみんなに知られてるのだろうな…
そして俺の今まで作り上げてきた学校での俺という存在がぁぁ！！！
「使徒、どうしたの？」
こいつは何でまったく動揺しないのだろう。
「なんでもないっす……それより今日は変なこと想像するなよ」
「変なことってどんなことぉ？」
今のは俺の言い方が悪かった。
「宇宙人とか、超能力者とか、殺人鬼とかそういったものが来てほしいとか思わないこと」
「うふふ」
余計なことを言うんじゃなかった…

１５分くらい待ったところで、凛が来た。
「ゴメンっ！待った？」
「待ってないよっ」
俺はその会話で表れた凛の表情から読み取れることを、出来るだけたくさん考えた。
しかし光から聞かされてないのか、いつもより晴れがましい笑顔だ。
「使徒、行くよ！」
なんだかもうミクも俺のことを名前で呼んでるし…
凛は一瞬そのことに驚いたようだったが、何事も無かったかのように歩き出した。
「あれ？海野は？」
もう中へ入るつもりでいるこいつらに尋ねる。
「なんか今日予定入ってこられないって」

へー…って女子：男子＝2：1かよっ。
つか、海野来てたら3：1になってたんだな…
海野は空気読むのがうまいな。今度礼を言っておこう。
「使徒ってさ、ミクちゃんと親戚だったんだね」
感情のこもっていない声。
「ん？あ、あぁ…うん。光から聞いた…？」
「うん」
光め……
「他なんか聞いた？」
恐る恐る聞いてみる。
「いや、何も聞いてないよ」
よかったぁ……光、良い所だけ伝えてくれたんだな。
「でもちょっと安心したわ」
少し言葉に感情が戻った。
凛の次の言葉が何か、すごく不安ということは変わりないが…
「何が安心したの？」
「ぇ、あー…ん～と…友達に使徒のこと好きな子いるからさ、ミクちゃんと使徒が付き合ってるって思ってたからっ」
何かすごく焦っている。
それよりも気になったのが、ミクと俺が付き合っていると思われていたことだ。
周りからみたらそんなに仲良さそうに見えるのか？
ただ席が近かっただけじゃないのか？
それに、俺のことを好きな人って…凛じゃなくて友達かよ…
「それより早く行かない？？」
ミクの声にはっとする。
いることをすっかり忘れていた。
「そうよね、どこ行くっ？」
やっぱりいつもより凛はテンションが上がっているように感じられる。

まぁいいか。

ミクと凛が服を買いたいというのでついていくことにした。
何にも考えずに中へ入ってついていく。
すると試着をするようで俺は距離を置いて立ち尽くす。
ミクが冷たい目で見ている。
「使徒、着替え見たら殺すわよっ！！」
「誰が見るか」
悩んで悩んで、やっと服を買い終えた。
「っじゃ、次いこっか」
「うんっ」
2人は前できゃっきゃと騒いでいる。
女の買い物は長い…
「ねぇ、あんたここもついてくる気？」
前は下着売り場があった。
「え」
間髪いれずにパンチが飛んできたと思うと、同時に凛の蹴りもきた。
「ぐ…行くなんていってねーだろ…」
俺の言葉など聞いているはずも無く、2人はもういなかった。
あいつら…

仕方なく近くにあった椅子に座って待つことにした。
「お兄さん1人？」
隣を見ると、派手なピンク色の髪をした若い子が座っていた。
派手なのは髪だけではない。
服装もコスプレかと思うくらい派手だ。
正直少し引いてしまった。
「連れがいます」
「まぁいいわ」
逆ナンかと思ったが、違ったようだ。

悔しいような、ほっとしたような…
「率直に言うね。私魔法使いっ」
・・・
「なんのカミングアウトでしょうか？」
俺の言葉に少し怒ったようにして立ち上がった。
「じゃあ証明してあげるわ！」
何の証明だよ…
彼女は手を上にあげたかと思うと、俺に向かって振り下ろした。
魔法をかけるかのように…
「えいっ」
ボンという音がして、煙が巻き起こった。
「何したの？」
「瞬間移動っ」
煙で彼女は見えないが、声からしてにっこにこだろう。
「ホントに出来るの？」
「当たり前でしょう」
煙がはれてきたら彼女の姿が見えた。
やはり予想したとおり笑顔だ。
周りは……海。
「ほらねっ！」
勝ち誇ったかのように腕組みをしている。
「で、俺に何か用なの？」
「何それっ。リアクション薄いなぁ」
ミクと一緒にいるせいで感覚が麻痺してますから。
「私もあなたと一緒で普通の人じゃないのよ。神野使徒クンっ」
何で俺の名前知っているんだ。
というか、何で俺が普通じゃないことを知っているんだ？
自分でどんな表情をしているか分かるくらい唖然としている。
「じゃあ帰りましょうか。またね」
え、ちょっと！

ボンという音と共に、元いたところに戻っていた。
周りの目が痛い。
俺はすぐさまその場から離れた。
「使徒～お待たせ～」
歩いていると、ミクと凛に出くわした。
「ミク、ちょっと来い」
引っ張って凛に声が届かないところまで行く。
「なぁお前、もしかしてここに着いたときに注意したことそのまま願ったか？」
俺は少し真剣だ。
ミクは罰の悪そうな顔をしている。
「魔法使いに会ってみたいなぁっていうのと…」
そのとき後ろからドタバタと走ってくる音がした。
誰かに追われているようだ。
横を通り過ぎたと思ったらすぐにバックしてこちらへ来た。
「ッフ、これはこれはミク様とにっくき奴ではないですか」
こいつは……何でここにいる。
「ゴメン、使徒。もっかいポチに会いたいって思ったのっ」
このうざい奴にか？
「お前ゲームの中のやつだろ？何でここにいるんだ？」
「ッフ、お前は知らないのか？ゲームというのはだな、遠くの星の人をあたかも自分が動かしているかのようにしているものなのだよ」
うわぁ…とうとうミクのせいでゲームの根本的なものが変わってしまった。
「ッフ、すまないが、何故か私は追われている身なのでなこれにてさらばっ！」
俺達の前をかろやかに走り去っていった。
「待てー！腰にさしているものを捨てなさい！」
そしてそれを追う人たち。
うるさかったところが急に静けさを取り戻した。

「使徒たち今の人と知り合い？」
気づくと隣には凛が来ていた。
「まぁ、そんなところ」
適当にはぐらかす。
「ちょっとあたしトイレっ！」
俺に荷物を押し付けて逃げやがった。
それにしても…
「ねぇ使徒…」
「ん？」
凛と2人きり…
はずかしいから早く戻ってきてくれ。
「ホントにミクちゃんって親戚なの？」
いつに無く真剣な表情。
「らしい。なんか親が死んで厄介払いで俺ん家に行けって言われたって言ってた」
俺はできるだけホントっぽく言った。
一部の嘘はホントっぽくするためだから仕方がない。
「じゃあなんで初めは『神野さん』とか『花園さん』とか呼んでたの？」
痛いところをついてくる。
「えっと…あれだよ。親戚って分かると同じクラスになれないだろ？」
「ふーん」
こんな嘘だれが信じるものか…
「ホントに何もないんだね？」
「うん」
「よかったっ」
やっぱり今日の凛はルンルンだ。
なんでだろう。
「なんかいいことあった？」

急に顔が真っ赤になった。
「そ、それは……」
「お待たせートイレ遠くて…」
空気読めよ……
「どうしかした？」
赤面している凛にミクがたずねる。
「な、なんでもないっ！買い物も終わったし、かえろっ！」
ミクの手を引っ張って行ってしまった。
やっぱりなんか変だ。

電車の中ではみんな無言だった。
ミクは楽しそうに外を眺めている。
凛は恥ずかしそうに下を見ている。
俺は不思議そうに凛を眺めていた。
この3人は、きっと傍から見れば恋人と妹のお守りって感じなんだろうなぁ。
そんな空気を引き裂くようにアナウンスが流れた。
俺たちは電車を降りて歩いて帰る。
行きは現地集合だったから良かったが、帰りは別々の方向になるまで無言だった。
「じゃあね」
「バイバーイっ」
ミクは1日楽しく終わっただろうが、俺はいろいろと不思議だらけだったぞ。
2人で道を歩く。
「ねぇ、凛ちゃんどうかしたの？」
「分かんね」
俺が知りたい。
「なんかテンション高かったり低かったりだったな」
「そうだよねー」

家に着いた。
これで休日がやっと終わる…
そう思った途端に脱力した。
ドアを開けようと思ったら、鍵が開いている。
「鍵かけたよな？」
「かけたよ？」
恐る恐るドアを開けて中に入った。
「使徒クーン！」
「っう…」
いきなり誰かに飛びつかれた。
ピンクの髪…コスプレのような服装……こいつは昼間の…
ミクが後ろで叫んだ。
「お姉ちゃんっ！？」

ラッキー？アンラッキー？

「ミク、何か言いたいことあるか？」
キッチンのテーブル。
ミクとミラは距離をとって隣に座った。
三者懇談のような配置で静かに問う。
「ありません……」
ミクはすごく素直になっている。
常にこんな風ならどれだけよいことか。
「なら次、君なんで俺の家にいる？」
「そりゃあ…ミクのお姉ちゃんだから…」
曖昧な返答。
少し長い沈黙。
カチ、カチ、っと時計の音が響く。
時々カラスがカァカァと鳴いている。
「なんで君らは不法侵入が得意なんだ？」
まさかこんなことを聞かれるとは思ってもみなかったようで、返事に困っている。
「いや、やっぱりいい。ミク、なんでお前姉ちゃんがいるって言わなかった？」
「だって…喧嘩してたから……」
喧嘩して、家出して、居候か…
「ミラが…あたしをちっさくしたんだもん…」
「ちがっ…私はただ呪文を間違えただけで…」
ミクが小さいのは自分でやったんじゃなかったのか…
姉妹喧嘩に俺を巻き込むな――！
「じゃあミラはこれからどうするんだ？」
ミラは一瞬おいて笑顔で言った。
「じゃあ私もここに……」

「却下だ」
キョトンとしたかと思ったら、急に立ち上がり服を脱ぎ始めた。
「な、何するんだ！？」
ちゃんと目を覆った指には隙間を作っている。
下着になったところで、ミラは服を脱ぐのをやめた。（っちぇ）
どこかへ歩いて行ったと思うと、電話の子機を持ってきた。
「警察に襲われたって言ってやろぉー」
「ごめんなさいスイマセンこの家好きに使っていいのでやめてください」
土下座…
「ありがとー！」
ミラが抱きついてきた。
もちろん下着のままだ。
「やめろっ！」
「姉ちゃんずるいっ！あたしもっ！」
ミクまで飛びついてきた。
これから俺はどうすればいいんだろう……

雨が降っていた。
女の子が泣いていた。
校庭のど真ん中で。
雨でベタベタになっても、手に持った傘は使おうとしない。
何かを叫んでいる。
その少女は苦しそうだ。
助けてあげたい。
何故か少女の気持ちが伝わってくる。

痛々しく、とても大きな思い。
あぁ…この子は……

「おっはよぉー！」
がばっと布団が奪われた。
目をこすりながら嫌々起きる…
今日は……学校！？
やっと悪夢から開放される――！
下へ降りていくと、テーブルの上にものすごい量の朝食があった。
「おっはよ使徒ぉー！」
飛びついてくるミクをさっと避ける。
「まさかとは思うが、これ朝食か？」
「うんっ」
2人は息ピッタリに即答した。
かと思うと、互いににらみ合う。
これが毎朝となると……
「これからは一食分でいいからあんまり作るな…」
怒る気にもなれない。
「ねぇ使徒クン、これ食べて！おいしいわよっ！！」
ミラが玉子焼きをすすめてきた。
「あ、お姉ちゃんずるい！使徒、これ食べさせてあげる。あ～んしてっ」
ミクも負けずと玉子焼きを、箸で口元に近づけてきた。
まさに漫画でありそうな場面だ。
「やめんかいっ！」
2人を押しのけ、1人でさっさと食べ終えて家を飛び出した。
家を出てからも中からはうるさい喧嘩声が聞こえた。

「おはよ使徒っ」
「おう、おはよ」
朝から凛に遭遇。
今日はラッキーかもしれない。
「おはよう」
後ろには海野と光。
光はもうこの間のことを忘れているかのように平然としていた。
「うわっ」
俺は光をちょっと強引に引っ張っていく。
「なぁ、凛に何言った？」
静かに耳元でささやく。
「親戚ってことだけっ」
「ホントにそれだけ？」
そういったら俺の肩を少し前へ押した。
「友達は信用するべきだよ」
あ。
それだけ言い残して逃げていった。
まだ聞きたいことはあったのに。
なぜ仲良く海野と登校しているのだろう…？

チョークで黒板に字を書く音だけが聞こえる教室。
今は数学の授業の真っ只中。
正直なところ、幸せな家庭など望めばいいだけだ。
よって俺は勉強などせずともよい人生を歩むことが出来る。

しかし、それではただの強欲な大富豪と変わりない。
だから努力は怠らずにこうやって授業に参加している。
時々サボることもあるが、それくらいは目をつぶってほしい。
さて、こうやって俺が受ける必要のない授業に真面目に参加し、努力しているのにもかかわらず、なぜミクはそれをぶち壊そうとするのか。
後ろから消しカスが度々飛んでくる。
きっと俺の頭にはカスが山のようについているだろう。
授業中に怒るわけにもいかない。
――授業中じゃなくともミクのファンクラブ（いつの間にか結成されていた）の護衛がいるため怒れるはずも無いが――
手紙として渡そうと思い、チャンスをうかがう。
今だ――！
「こら神野！」
く……ばれた…
こちらへ近寄ってくる。
「あ、いや…そのですね…」
必死にごまかそうとする。
不運にも数学担当の森はかなり怖い。
「なんだその頭は！？挑発してるのか？」
「だから、ちがっ…」
ハハハと、クラスから笑い声が上がった。
森め…許さん。
「ん？その紙は何だね？」
ぇ…
「うわぁあー！！！！」
不覚にも完全に紙のことを忘れていた。
手からひょいと取られた。
こうなったらお終いだ。
「見られて何かまずいものかね？何々…『うざいわ！邪魔すんな！』

」
げ…
「僕、消しカスのせたくてそれ書いたんじゃありませんよ…？」
「ほう。私の授業への冒涜かね？」
げげげ…
間違った方向へと流れてる…
「私と特別に個人授業をさせてやろう。来なさい」
『来なさい』という言葉がとてつもなく怖かった…
みんなはクスクス笑っている中、俺は立ち上がる。
仕方が無く歩いてくと、凛と目があった。
なんと鼻で笑われ、すぐに目をそらされた。
今日はアンラッキーかもしれない。

家へ着いた。
今日は光が遊びにくるって言っていた。
玄関のドアを開けようと思ったときに重要なことを思い出した。
家にはミラが…
光にどう説明しようか。
悩んでいてもしょうがない。
まずは家の中へと入る。
「おっかえりぃー！！」
ミラが飛びついてきた。
さっとかわす。
しかし後ろからまたもや飛びついてきた。
避けようと思ったが、体が動かない。
「おかえりー使途クンっ」
後ろから抱きつかれた。
ミラはいくつか知らないが、高校生くらいだろう。

同年代に抱きつかれるなんて初めてで、顔から火が出るかと思った。
ミクも高校生らしいが、あの背じゃなんとも思わない。
「やめてくれ…」
心臓が高鳴る。
「んーもう！『おかえり』って言われたら『ただいま』でしょ！」
「うっ…」
まずい…強く抱きしめてきた。胸が…
というか、今この光景を光に見られたら――

「使徒ー！」
・・・・・・
「あははは。お邪魔しましたぁ」

――考えたくもねぇ！！
「お願いだからどいてくれ」
そのとき、扉のドアノブが下に下がった…
もう終わりだ。
今の俺にはその光景がスローモーションに見える。
ゆっくりと扉が開く。
「ただいまぁっ！…お姉ちゃんっ何してんの！？」
ミクかよっ。
まぁ助かった。
「せっかくいいとこだったのに…」
「何がだよ…」
というか、体がうごかない。
動け動け動け動け――――
「はぁ…やっと動けた…」
「あれ？束縛の術かけたはずなのになぁ」
そんな術覚えなくてよい。
「お姉ちゃんって魔法使えたっけ？」

皮肉たっぷりに言う。
「失礼ねっ！ちゃんと使えるわよ！爆発魔法と束縛魔法は得意なんだからねっ！」
どちらも危険ですよ、ミラさん。
そういえば…
「瞬間移動のは？」
「あれは山に行くつもりだったんだけど…失敗しちゃったっ」
おい…変なとこに行ってたらどうしてくれたんだ。
時間は過ぎていく。
「光があと少しでくるから。というかミラは親戚ってことで頼む」
「了解しましたであります。隊長っ！」
手を軍隊の人たちのように、額にもっていっている。
なんか無邪気で楽しそう。
「どちらかというと見つからないほうがいいからどこか部屋に入ってて」
「隊長のご命令ならば」
今度はミクも一緒にまねをした。
仲の良い姉妹にしか見えない。
少し口喧嘩をしながら部屋へ入っていった。
よし、これでいつ来ても準備万端。
ピンポーン
ふふふ、ナイスタイミング。
「っよ」
「おう」
光は俺をじろじろと見る。
正直言って気持ち悪い。
「今日はミクちゃんと変なことしてないんだ」
「今日もだ」
二階へ行って自分の部屋のドアノブに手をかけた。
まてよ…

あいつらまさか俺の部屋に入ってたりは――
「ん？使徒どうかした？」
やばい。すっげぇ冷や汗が出てきた。
うわー…どうしよう…
「何やってんだよ」
「おい馬鹿っ！」
使徒が勝手に開けやがった。
「何してたんだお前？」
中にはいなかった…
びっくりさせやがって…
と思ったら急に扉が開いた。
「ねえ使徒クンっ！」
・・・
光は唖然。
やっぱ今日はアンラッキーだ。

取り合い

気まずい空気が流れる…と思ったが、そうでもない。
「使徒、また親戚？」
よく分かってるじゃないか。
「そうそう」「違うわ」
同時に矛盾した言葉を発した俺とミラ。
嫌な予感がする。
ミラを横目で見ると、やはり俺が思ったとおりの顔をしていた。
「私は使徒の恋人ですっ」
「違う。こいつはミクの姉さんでミクがここにきたからミラが面倒を見るために来ただけであって決してそのような関係ではないっ！」
真剣に、早口で、息が切れるほど必死に訴えた。
光はミラよりも俺の言葉に驚いているようだ。
「お前さ、ホントのこと言っててもその言い方じゃ逆に怪しいぜ？」
俺はホントのことを言っただけなのに――！！
「怪しいも何も、恋人ですし」
「話をややこしくするな」
目を見開いてにらむ。
「そんな目で見ちゃいやっ…」
「なぁ使徒、ホントはどうなんだ？」
泣きたい衝動に駆られる。
俺は光の肩に手をポンと置いた。
「友達は信用するべきだよ」
「はいはい」
案外すんなりと言う事を聞いてくれた。
やっと物事というものを分かるようになったらしい。
「使徒ーっ！」
う…また話がぐちゃぐちゃになりそうな予感。

「今日夕飯何が――」
一瞬おいた。
「お姉ちゃんなんでここにいるのよっ！」
「残念でしたぁー。もう私が先に聞きにきたんだもんねー！」
コイツら考えることは同じか…
共に出し抜こうとして結局光に見つかる。
俺に好かれようとしてやっている（仮定）ならマイナスになってるぞ。
「何いってんのよ！毎日あたしが料理作ってるんだからお姉ちゃんは作らなくていいのっ！」
「そっちこそ何よっ！あとから来たくせにっ」
「あたしはちゃんと使徒との約束守ってたんだもん」
「今ここにいたら結局同じじゃない！」
俺と光の横で喧嘩をはじめた。
「使徒、お前毎日こんなんなのか？」
「ミラがきたのは今日から…これからこんな毎日が続くと思うと嫌になるよ…」
そういうと、光がすっとんきょんな声を出した。
「何言ってんだよ！羨ましすぎるぜ…」
光はとうとう頭がクラッシュしたようだ。
なおも横では喧嘩が続いている。
「出来ることなら代わってやりたい」
「ダメよ！」
2人は息がそろっているのか、そろっていないのだか。
一瞬2人はにらみ合ってすぐにこちらを向いた。
「使徒クンがこの家から出てくなら私もでてく」
プイっとそっぽを向いてしまった。
「あたしだって出てくわよ！」
「だから代われるものなら、と言ったろ…」
そういうと、2人とも飛びついてきた。

「出ていかないんだねっ？」
俺は引き離そうとするのに、２人はしがみ付いて離れない。
「やめろっ！…おいっ！ばかっそこは…ぅ…」
その光景を光はただ呆然と見ていた。
「光！助けろっ！」
目は虚ろ。声をかけても反応はない。
「使徒おっきー！」
このクソませ馬鹿ガキ――！！！
「そこ触っていいのは私だけよっ！ね、使徒クン？」
『ね、使徒クン』じゃねぇ！
俺のモノを取り合うなぁ――！！！
「うぉお！」
２人を引き離すことに成功した。
「どさくさにまぎれて変なことすんなボケっ！」
「お前は毎日こんなんなのか…刺激が強すぎるな…」
目が虚ろで真正面を向いたまま硬直している。
きっと正気を取り戻したらみんなに言うんだろうなぁ。
俺の日常、プライド、すべてが破壊されていく…
悲しみに打ちひしがれてしまいそうだ。

光とあのあとは普通に遊んだ。
今人気のゲーム怪物狩人　弐＋αをやった。
ただ怪物を狩るだけなのだが、かなり面白い。
特に狩人たちが協力して助け合うのは友情があふれる。
そんなことは措いておこう。
祐樹が帰り、ミクが風呂へ入った。
ミクは風呂へ行く前に『使徒も入りたかったら入っていいわよ』と

言われた。
なんだかミラが来てから性格が変わったような気がする。
前なら多分『覗いたら殺すわよ』って言われてたはずだ。
どちらも嫌だな…
リビングには俺とミラ。
ドラマを見ている。
「お前昼って何やってたんだ？」
ふと口に出た。
自分でもこんなことは聞くつもりは無かったんだが――
「そんなに私のこと気にしてくれてるの！？」
まともな返事は返ってこないと思ったよ。
「何してたんだ？」
もう無視して無理矢理押し通した。
するとため息をつきながら答えた。はじめからそうしろよ。
「入学手続きよ。家にいるわけにもいかないし」
まさかこいつも学校来るのか…？
「何高校？」
「え　使徒クンと一緒に決まってるじゃない」
決まってねーよぉ――
というか、ミラって年いくつだろう。
「校長先生って許してくれたのか？」
あのお泊り高校を開いた校長は見事に返すメドのない金を借りまくり、銭湯を立てたり豪華料理を振舞ったりしたおかげで退職させられた。
ホントミクは最低だ…
あいつにかかわった人って絶対不幸になるよなぁ。
俺ってまさかそうなるのか！？
いやいや、今十分そうなってるじゃないか――
不幸ではないけど…どちらかというと災難にあっているといった感じだな。

そういえば今の校長のことは知らない。
一度自己紹介をしてたが寝ていた覚えがある。
「なんだかよく分からないけど『可愛いからＯＫ』だって」
思わず自分の耳を疑った。
前の校長のほうがよかったかも……
「で、学年は？」
「１年生じゃないと使徒クンと一緒になれないジャン？」
だから１年生だというのかな、この子は。
「ミク妹なんだろ」
「いいわよ。どうせ似てない姉妹だしバレやしないって」
そういうもんだいじゃないって…
「でもクラス違ったら俺と一緒じゃないよ」
「あー。それなら大丈夫よ。校長先生に『使徒クンと同じクラスにしてください』って言ったら『可愛いからＯＫ』って言ってたから」
きっとその校長退職だろうに。
というか校長先生になれるような人がそんなことを言うだろうか？
考えたくも無いが、ミラが魔法を使って―
馬鹿馬鹿しい。俺が知るものか。
会話が途切れた。
ドラマを見るとクライマックスのようで、気持ちがそちらへいった。
ほとんど会話してたからなんとなくだが、恋愛ドラマだった気がする。
きっと今からキスでもして終わりなんだろう。
ミラも静かに見ている。
「真さん――」
橋の下を通るフェリーの甲板で彼氏を呼ぶ女の人。
それに気づいて振り返る真と呼ばれた男の人。
なんだかこのドラマ臭すぎるぞ。
「麻衣…どうして…」
男のもとへ駆け寄って抱きつく女性。

「ごめんなさい　ごめんなさい…」
「いいんだ」
そして夕日をバックに口づけを…
「使徒クン…」
「うわあああ！！！！」
近い近い！
横を見たら３ｃｍ前には顔があったぞ。
ミラはふて腐れている。
「しっつれいね。そこは『ミラ…』ってあまい声をだすとこでしょっ！」
どうしてそうなる…
すごいドキドキして恥ずかしい。
一応俺、まだ彼女作ったことないんだぜ。
目の前にいるのはどう考えても美少女で次元が違うと思う。
それにくらべて俺はただの高校生。そう、ただの。
誤解を招かないように言っておくが、決して俺が望んだわけではないぞ。
ミクに通用しないのにミラに通用するはずなかろう！うん。
「あら、顔真っ赤よ？」
「うわぁっ！」
今度は俺の頬を両手で挟んできた。
よく考えたら俺って女子と触れたことほとんどない…
なのにいきなりこれかよ…
「熱でもあるのかしら」
「や、やめ…」
おでこを合わせてくるミラ。
顔が相当近い。
もうやめてくれ――――！！！！

「はぁ～……」
なんであいつらは俺に絡むんだろう。
ミクなら男子から人気あるんだし、俺なんかほっといて佐藤とか鈴木とかと絡めばいいのに…
そっちのほうがスポーツもできるし顔もいいし頭だって……
ミラも普通に街歩いてたら１００人くらいにナンパされるだろうに。
（アキハバラだったらきっともっとすごいだろうな）
…なんか俺へボくないか？
そんなことない！俺にだっていいところは――
・・・
・・
・
まぁそんな2、3分で見つかる分けないって。
プラス思考！プラス思考！
プラス思考……
「はぁぁぁぁ……」
なんか落ち込んでくるよ。
浴槽から出て体を洗う。
ホントなんで俺なんだろうなぁ。
でも絡むってことはいいところがあるってことだろ。
優しいところか？
俺って優しくないよな。
表面は普通だが、実際の俺はすごく性格悪い。
自分で時々怖いし…
「使徒ー！！！」
一瞬何が起こったかわからなかった。
目の前にはミク。
ちゃんとバスタオルは巻いている。
「お背中流してあげる！」

「出てけ！！！」
あいつら、俺をオモチャにしてるのかも…
そう思うと一層つらくなった。

すれ違う思い

ぁ～あ…
爽快な青空の下、憂鬱に学校へと向かう。
（もちろん家からは逃げてきたんだが――）
朝から過激な姉妹喧嘩と大量の食事で脳震盪を起こしそうになる。
ミラが来てから今日で2日（かな？）。
妙に長く感じられた。
はぁ～…
ブォォォ～っと俺の上を通る飛行機。
雲を切り裂いていく。
俺はこの先どうなるんだろうか。
きっとあの雲のように真っ二つになるようなつらさがまってるんだろうなぁ。
前をみた。女の子が立っている。
金髪、ショートヘアのすごく可愛い子だ。
どこの子だろう？
制服は俺の通う高校ではない。
ここらにこんな可愛い子はいた覚えはないんだが…
彼女は何をしているのか、手に何かを持って突っ立っていた。
なんだか通りづらい。
道路の脇の壁にもたれている。
その前を出来るだけ離れて通った。
「あの…」
空耳かなっ…と一瞬たじろいで止まった。
いきなり見ず知らずの人に声をかけられることなんてあるのだろうか？
彼女の方を見ると、下を向いて手を組んでいる。
自分の手から目をそらすことはない。

やっぱり気のせいだ。
この頃あいつらのせいで体調がおかしくなってるんだな、うん。
「あのっ…」
もう一度行こうと歩き出したら、また声をかけられた。
今度は大きめの声で。
やはり空耳ではなかったようだ。
「はい…」
彼女はやっぱり下を向いたまま。
何だろうこの子は。
不思議だ。
一時の沈黙。
しかも今８時２０分。
始業の前の３０〜４０分の間に、読書とかいうふざけた時間があるせいで３０分までに行かなければならない。
早くして欲しい。
「何？？」
ちょっと焦ってるのもあって、もう一度問い直した。
すると彼女はやっと顔をあげた。
しかもものすごい速さで。
目があった途端、すごく恥ずかしくなった。
正面からみた彼女は横顔よりも一段と可愛かった。
「付き合ってください！返事あとでいいです！」
ダダダダダ
聞こえるのは彼女が走り去っていく音だけ。
何が起こったのかさっぱりわからない。
なんか言葉と同時に紙を前に出されて、条件反射で取ってしまった。
中…見ていいのだろうか？
というか、待て。
人生初の告白（受動態）じゃないか？
つか———誰？

気持ちの整理がつかないまま学校に着いた。
ちなみに着いたのは８時３５分。
当然みな教室で静かに本を読んでいるわけで、担任の鶴山に怒られたときは恥ずかしかった。
しかも言い訳できない。
突然道路で告白されて……って誰が信じるか！
信じる、信じないの前に人にこういうことって言っていいのかも分からない…
とりあえず、凛辺りに相談してみるか？
あいつなら告られまくってるし、こういうこと得意だろ。
でもなぁ……好きな人に告られたこと言うってどうよ。
なんか違う気が…
う～ん……
「どうしたの？」
「うわっ！」
まさか凛のこと思ってて凛に話しかけられるとは思ってなかった。
「何その反応…人が心配してやってんのに…」
心配？
俺は健康だぜ！
不健康といえばミクとミラがいることで心の面が不健康だ。
そういやミクは適当に男子と戯れてるとして、ミラまだ転入してこないのかな？
いや、こないでほしいな…
はぁ…
「なんかあんたおかしいよ？さっきからため息ばっか」
あぁ、空が青いな…
俺の心は真っ白だ。
俺の人生真っ白だ…

あはは。
「ねぇ、聞いてる？上の空だけど…」
そういやさっきの子からもらった紙、なんだったんだろうな。
というかまだ手に持ってるし…
これはどうしよう。
「あんたやっぱおかしいよ…？――その紙何？」
さっと俺の手から掻っ攫っていった。
「おい、ちょっ！」
「やっとまともな反応したわね。まぁ今までシカトした罰として見せてね」
あ～～～！！！！！
俺の初の告白された人からもらったものを俺ではない人が初めに見るってどういうことだ！
凛の表情が変わっていった。
何が書かれているのだろう。
「凛？」
「ゴメン…これ返すね」
ぐっと紙を胸に押し付けて凛は教室を出て行った。
何が書かれているのだろう…
恐る恐る見た。

神野使徒君へ
いつも、遠くから眺めていました
きっと使途君はわたしのこと知らないと思います
今日夜９時に朝の場所で待ってます
返事聞かせてください

桂　来夢

一見普通のラブレターに見えた。
桂（かつら）　来夢（らいむ）という文字が目に入るまでは。

桂といったら、ここらで1番有名な女子高、東静高校一の美少女ではないか…
顔は知らなかった。
噂だけは知っていたのだが、興味もなかった。
俺は凛が好きなんだし…
なんで俺なんかをあんなに可愛い子が好きになるんだ、と不思議なんだが…
それ以上に、どこで彼女と俺に接点があったのかが不思議だ。
絶対に俺はあったことはない――――と思う。
そんなことより――――凛…もう授業始まるのに…

その後の授業は、英語だった。
しかし凛は教室に来なかった。
キーンコーンカーンコーン
授業終了。
「ねぇー使徒。凛ちゃんどこ？」
「俺に聞くな」
ほんとにどこいったんだろう。
というかあの紙見てからどっか行くってことは――――嫉妬か！？
まさか俺のことが…
ってありえねー。
こんなこと想像するなんて…
自分で自分が恥ずかしい。
「使徒最後に話してたじゃんか」
って言われてもねぇ…
「もしかして凛ちゃんにひどいこと言ったの！？」
「言ってねぇ！！」
くっそ…ミクめ…
こんなとこで大声でそんなこと言うなよ。
男子の視線が痛いじゃないか。

凛ただでさえ男子から人気あるんだから。
「探してくる」
その場から逃げる意味と本心から探したいという思いをこめて言い放った。
教室を出たはいいが、どこにいるかなんてまったく想像もつかない。
どこだろう。
とりあえず人が隠れられそうなところを探してみた。
他のクラスも探してみた。
そうだ、保健室行ってるとかは――
いない――
ホントどこいったんだろう…
キーンコーンカーンコーン
もう授業が始まってしまった…
しかも次はこないだサボった理科じゃないか。
少々あせりながら探す。
屋上でも行ってみるか。
鍵がかかってるだろうし、天文部でさえない凛がいるはずもないとは思うが。
やはりいない…
あとは……体育館。
体育館のほうからは声がしないし、体育では使われていないようだ。
理科を集中してサボるのはよくない。
できるだけ早く見つけないと。
体育館へと息を切らして向かう。
着くまでがすごく長く感じられた。
もし、凛がいなかったらどうする？
他の場所は全部調べた。
ここにいるはず。
その前に、何で急に教室を出ていってしまったのだろう。
様々な思いを抱えながら体育館の扉を開ける。

広い空間をぐるっと見渡した。
静かな空間は俺を威嚇しているようだった。
授業に戻ったのかな？
「使徒――」
体育館をあとにしようとしたとき、声が響いた。
ものすごく小さな声だったが、確実にそう聞こえた。
もう一度中を見渡すと、向こうのドアのそばに立っていた。
俺はすぐさまかけよる。
「何やってんだよ！授業サボって…」
おかげで俺まで理科の先生に怒られるだろうなぁ。
「ごめん…」
思った以上に素直な答え。
声がキャンプファイアーのときと似ていた。
「ごめんね…」
もう一度繰り返したかと思うと、泣き崩れた。
俺はどうしたらいいかわからず立ち尽くす。
すすり泣く声だけが響く。
「ど　どうかした？」
女の子が泣いているにもかかわらずそんな言葉しかかけられない。
「使徒ぉ……」
泣きながら、目をこすりながらこちらを見る。
目と目が合った途端、すごく罪悪感を感じた。
俺が泣かせているのかどうかは分からないが、きっとそうなんだ。
「大好き……」
――
静かな体育館に響いた声は、俺の想像していたもとははるかに違い、
俺の横を一瞬、風が吹き抜けたように感じた。
今までの出来事がすべて順にフラッシュバックしていき、
フクザツな気持ちで心が溢れた。
俺も、と言っていいのか迷う。

正直なところ、朝の告白で俺はすごく悩んでいた。
凛と付き合えることなんて絶対無いと思っていた。
だからこの際、付き合ってみるのもいいと思っていた。
「私、ずるいよね…使徒告白されたって分かってたのに…今こんなときになんて…」
「そんなこと…」
そんなこと、ない。
凛の行動、すべてずるいなんて思ったことなど今まで一度だってない。
「いいの、ずるくてもいいと思っちゃったの……どんなことしてもいいと思ったの…使徒が私から離れてくのはイヤ…それだけはイヤ……」
俺は凛を気づかないまま傷つけていたんだ…
「好きなの……使途が…ずっと、ずっと、中学から…ずっと…私には使徒しか映らないの…」
なんで、一番大切にしたいと思っていた人がこんな目の前で泣いているんだ。
俺が望んだのはこんなことじゃない。
こんなこと望んでいなかった。
こんなこと…望んでいなかった…
そうだ、知っていたじゃないか。
望んだのは凛の気持ち。
俺が凛の気持ちを望んだんじゃないか。
あの、雨の中で泣いていたのは凛だった。
ずっとずっと苦しんでいた。
でも気づいてあげることが出来なかった。
もっと早く気づいていれば……こんな凛を傷つけることはなかった…
「ゴメンね…使徒は桂さんに告白されたんだもんね…もう、遅いよね…」
こんな…

「困るようなことといってごめんね。じゃあ授業いかなきゃ」
無理して笑って俺の前から走りさっていった。
最後に目に映った彼女の目からは涙が溢れていた。

答

俺は馬鹿だ。
何１つとして言葉をかけてあげることができなかった。
ただただ、彼女の言葉を受け止めることに必死だった。
何も言うことができなかったことをすごく悔いている。
もう、傷つけてしまってからでは遅い…
携帯のディスプレイを見ると、８時と表示されていた。
こんな心境であの子にどうやって会えばいいんだろう。
「使徒ー！ご飯できたよー」
下からミクが呼ぶ声がする。
今は飯を食うような気分なんかじゃない。
でもあいつらが気を使ってくれていることは分かる。
いつもなら馬鹿みたいに騒いで俺のところに来て邪魔ばかりする。
でもそれがない。
俺の雰囲気で分かるのだろうか？
下に着くと、ミク達はもうテーブルについていた。
「来るの遅いから先食べちゃってるよ」
「あんまり量作っても食べられないから交代で作ることにしたからっ」
やはり気を使わせているようだ。
無言で食事を済ませると自分の部屋へ戻り、ベッドに横になった。
もう一度携帯のディスプレイを確認する。
８時４０分。
あと２０分。
どうしよう…
そういや凛に見られたってことはもしかしたら来るかも…
そんなことになったら最悪だ。
コンコン

部屋をノックされた。
いつもならノックなんて絶対しないのに…
「いいよ」
ミラだった。
「何か用？」
「9時にどこか行くの？」
なんで知ってるんだろう。
いつもなら驚くんだが、凛のことを思うと自然と心が落ち着く。
「うん」
「女？」
どう答えればいいのだろう…
「うん…」
取り合えず嘘はつかない。
今は何故かそんな気分ではない。
なんか心が落ち着いて、何でも曝け出してしまいそうだ。
前だけを、上だけを見続けてそこから目をそらしたくない。
「じゃあ先に言っておくね。私達親戚じゃないのよ」
そりゃどこまでを親戚っていうのか知らないが、遠くたどっていくと皆親戚ってなっちゃうからね。
「それで　何？」
嘘だったのか！？とか、そんな反応を期待したんだろうな、きっと。
さびしそうな顔をしている。
「それを踏まえてもう一度言うわ。私は使徒クンが好き」
……
「それはどういう意味で？」
「恋愛関係」
簡潔に返してきた。
「使徒クンがあの子を好きって言うならあきらめるわ。でも私の気持ち知っておいてほしかったの。いつもはふざけてるみたいで相手にしてもらえないから…」

まただ…
また俺は知らない間にミラを傷つけている。
「決めるのは使徒クンだから……じゃあ気をつけてね」
何もいえなかった。
どうして俺はこんなにも勇気が出せないのだろう…
どうして俺はこんなにも人を傷つけてしまうのだろう…
どうして恋をするのはこんなにもつらいものなんだろう…
８時５０分
家を出よう。

「お姉ちゃん言ったの？」
「うん…」
ミクの部屋。
女の子の部屋だけあって、部屋はピンクを中心に彩られている。
ぬいぐるみもたくさんある。
「別にあたしは恋愛感情ないから張り合うつもりはないけど……ただ使徒は奪われたくないんだよね」
「私は好きなだけよ…」
はぁ…っと大きなため息をつくミク。
ミラをじっと見つめる。
「好きなのはいいけど、少しの間見ただけで好きになるのは本当の面が見えてないからかも知れないよ？それで傷ついたらダメじゃんか」
ミラは下を見て黙りこくってる。
今にも泣きそう。
どちらがお姉ちゃんか分からない光景だ。
「仮にもあたしのお姉ちゃんなんだからシャキっとしなさいよ！シャキっと！」

涙を必死にこらえるが、止まらない。
「ありがとう……」

今日朝会った場所。
何の変哲もない車のとおりが少ない道路。
そこに彼女はたっていた。
「使徒君、来てくれないと思ってたのに」
今は９時ジャストだ。
特に遅れたわけでもないのに。
「レディを待たせるのは良くないことよっ！集合時間の３０分前にはいなきゃね」
この子は見た目とは違ってよく喋るなぁ。
周りは真っ暗で独特な雰囲気を醸し出している。
空を見上げると、星達が互いを美しく見せ合おうとしているのか、いつもより輝いて見える。
「ちょっと聞いてる！？」
「あ、うん…ごめん」
なんか話しづらい。
初めて会ったからか？
……多分意識しているからだと思う。
「って？」
「はい？」
すっとんきょんな声が出てしまった。
まさか一文字で返してくるとは思わなかった。
「何が『はい？』よ！私は返事を聞きに来たのっ！」
あ…そうだった。
まだ返事決まってないのに――
「まさか　返事決まってないとか言うんじゃないでしょうね！？」
ぐ…鋭い…

「やっぱりそうなんだ！その顔は！」
「いや、そ　そんなことないって！」
そんなことある！
あーどうしよう…
また傷つけてしまう…それだけは――
「じゃあ教えて」
彼女の目が俺の目とピッタリあった。
そらしたい。
しかし彼女の目は俺を吸い込むかのように目をそらさせてはくれない。
とても整った顔。
大きな瞳。
生き生きとした唇。
さらさらのきれいな髪。
可愛い…
でも俺……凛のこと好きじゃなかったのか…？
「今他の女のこと考えたでしょ」
「え！　考えてない！」
鋭いぞこの子…
「まぁいいわ。どうせ私となんて一回もあったことないもんね」
やっぱりあったことは無いんだ。
「じゃあ何で俺なの？」
「好きだから」
即答簡潔意味不明だって。
答えになってない…
「俺と接点ないじゃん」
「だって…だって…」
彼女は赤くなって俯いた。
と思ったら顔を朝のように急に上げた。
目と目が合う。

赤面した顔がすごく可愛い…
「ストーカーとか思わないでよ！毎日見てたの！毎日、毎日、帰りも朝もさりげなくあんたの近くにいたの！」
すごい迫力で大きな声が静かな夜に響き渡る…
「おい…ちょっと場所移そっ。ここじゃうるさいし…」
「いつか気づいてもらえると思ってたのに…」
そう呟いた気がした。
近くの公園に向かった。
着くまでまったくの無言で気まずかった。
着いたは着いたでいいけど、夜の公園って雰囲気あるなぁ…
適当にベンチに腰掛ける。
「さっき…ゴメン…ちょっと熱入っちゃって」
「いいよ別に」
沈黙が続く。
非常に気まずい。
鳥か何かが木から飛び立ったとき、彼女がビクッとして俺のほうへ寄ってきた。
心臓が高鳴る。
女の子の手って柔らかい…
腕に手が触れて、そのままの状態。
しかも怖いのか怯えている。
その表情がまた可愛い。
俺、凛に何も言われてなかったらきっと付き合ってただろうな。
まだ付き合わないと決めたわけじゃないんだが。
「ねぇ…」
やっと口を開いた。
すごく小さな声。
「私、使徒君に好きな人がいてもいいよ」
「え？」
驚いた。

そんなことを言われるなんて思ってもいなかった。
「少しづつでもいいから私好きになってもらえるように努力するから…」
そんなこと言われても…
彼女は立ち上がった。
「私は神野使徒君が好きです。付き合ってください」
カァァっと体が熱くなるのが分かった。
紙に書かれて渡されるよりもずっと気持ちが伝わった。
断るときっとまた傷つけてしまう。
でも受け入れたら凛もミラも傷つけてしまう。
そもそも東静の美女がなぜ俺なんかを好きに…
そんなことといいとして返事は…どうしよう。
彼女は礼をしたままの状態で待っている。
つらい…
「分かった」
「え！？」
「いいよ付き合っても…」
凛とミラを裏切るような感じになってすごくつらいけど…
やっぱり知らない子が、これまで俺のことをずっと影で見ていてくれた子がこんなに必死になってるのに付き合えないなんて言えない…
「ホントに！？」
「うん」
ぎゃっ…
いきなり抱きつくとは……
やっぱり2人には申し訳なくて抱き返してやることはできなかった…
今日、俺は複雑な心境のなか、初めて彼女ができた。

初めてとさよなら

また、一日が始まる。
鳴り響く時計。
着替えを済ませ、下へ行く。
朝食はきっちり用意されていた。
しかし2人の姿はなかった。
静かな食卓。
料理はおいしいのに何か味気ない食卓。
これが今まで普通だった。
でもミクたちが来てからは違った。
ともかく、学校へ向かわないと。

あの後、家についてからミラと顔をあわせることはなかった。
俺がどんな答えを出したかは知らないと思う。
魔法を使えばそんなこと一瞬で分かるだろうが、ミラはそんなやつじゃない。
ミクとは一度会ったが、すぐに目をそらされた。
確実に俺は1人だけ別世界だった。
「おはよっ！！」
途中、声をかけてきたのは光だった。
「おう」
「こないだのことは黙っといてやったからな！」
こないだ…？
あぁ――
でも今はもう……
「ありがとな」
「おう！そういやさぁ昨日凛どうしたの？」
ギクッ。

そういや凛の気持ちも裏切ってしまったんだ。
俺が好きなのは凛……
でも付き合ってるのは桂…
俺はなにをやっているのだろう。
あやふやなままでいいのだろうか。
「凛ってさ、お前のこと好きなんじゃないの？」
ドキンッ。
なんで…知ってるんだ？
見られてた？
「それは…ない…」
「なんでそんな言い切れるんだ？今までの凛見たらどう考えたってお前のこと好きだぜ？」
そんな…
気づいてなかったのは俺だけだったのか。
「鈍いのもほどほどにしないとな」
「俺、他校のやつと付き合うことにしたから」
こんなこと昨日の今日で言うことじゃない。
でも、いつかは言わなければならない。
「そうか…頑張れよ」
この後は学校につくまで会話は無かった。
なんと言ってよいのか分からない。
どんなことを言っても今は光に拒絶されそうだった。

教室に入る前に、たじろいだ。
凛にどういった顔を向ければいいのだろう。
会ってもいいのだろうか？
言わないほうがいいか？
ちゃんと言ったほうがいいか？
「神野、突っ立てないでさっさと入れよっ！」
クラスの男子に押されて扉を開けた。

凛は……いなかった。
そんなに昨日のことが辛かったんだろうか。
申し訳無さでいっぱいになった。
「席着け～ホームルームはじめるぞ～」
みな席につく。
「せんせー。凛は欠席ですか？」
クラスの女子が聞く。
「熱が高いから休むそうだ」
なんだ…俺のせいじゃない。
そう思うと心が軽くなった。
あとでお見舞いにでも行こうかな。

学校が終わった。
チャイムと同時にみんな部活へ行ったり帰ったり。
俺は部活に行くことなんかなく、校門へ向かう。
「ぁ！来た来た　使徒君！」
あれは……桂っ！？
「なんでいるの？」
みんなこっちを向いている。
周りから不釣合いだとか、あれ彼氏！？とか言う声が聞こえてくる。
はいはい、俺はどうせ不細工ですよぉーだ。
「なんでって……待ってたの」
くっ…可愛い。
でも今日は凛のお見舞いに…
「ゴメン…今日用事あるんだ…」
「――そう」
悪印象だったかな？
「じゃあまたね」
走っていってしまった。
やっぱり追いかけるべきだろうか…

「ほほ～う。あれが使徒の彼女ですか？」
「ふへ¥#いは！！！」
急に光が背後から出てきた。
「桂にお前…告ったのか？すごい勇気だな…」
「違っ！俺からじゃない…というか何でお前桂のこと……」
光は俺からじゃないという言葉に少なからず反応したが、あえて触れないような態度をとった。
「桂っていったらここらじゃ有名じゃんか。顔知らないのお前くらいだぜ？」
そんな有名だったのか。
東静一ってことは知ってたけど…
「それよりいいのか？彼女、もてるからねぇ。うかうかしてるとすぐに他の美男子に取られちゃうぜ」
そうだ…
俺、桂の彼女なんだ…
用事より先に彼女優先するのは当たり前なんだ。
何やってんだよ！もう！
でも…俺は……

ピンポーン
マンションの４階。
家にも帰らずに学校から直接むかった。
「は～い」
出てきた凛はパジャマだったがすごく元気そうで安心した。
「……使徒」
「あ　あのさっ　今日休んでたじゃん！お見舞いに…」
寂しそうな顔を浮かべた。
でも俺はもう…
「入って」
凛の部屋に入れられた。

中はとてもきれいに整っていた。
ここで凛が生活してるのか…
ここが凛のすべて…
「座っていいよ」
座ってって言われても…
凛の部屋にあるのはベッドだけ。
ちょっと恥ずかしい。
「何意識してんの。隣でいいから」
「ぁ、うん…」
なんだか凛が怖い…
俺のせいだってことは分かってる。
凛は隣にいるのに何も話せない。
言葉が見つからない。
「熱、大丈夫っ？」
違う。
いいたいのはこんな言葉じゃない…
「熱？仮病よ」
仮病！？
1人で心配して何やってんだろう…
「使徒と会うのが怖かった」
そう…だ。
はっきり言うべきなんだ。
でも…
キャンプファイアーのときに見た涙。
昨日見た涙。
声や姿は似てたのに、全然違う涙だった。
きっと話してしまったら昨日と同じ涙が流れるんだろうな…
それだけはいやだ…
「今ね、親買い物行ってるんだ。あと2時間は帰ってこない」
…誘ってるのか？

という前に…彼女いるのに部屋に彼女以外の女といるっていいのだろうか。
「ねぇ、桂さんＯＫしたの？」
――――
まさかいきなり核心に迫られるとは…
どう言えばいいんだろう……いや、本当のことを言うしかないんだろうな。
「分かってるよ、ＯＫしたに決まってるよね～」
俺が口を開こうとした途端、さえぎられた。
「桂さんホントに可愛いもんね…」
違う…俺がＯＫしたのはそんな理由じゃない。
彼女はすごく俺のことを思ってくれてたから…
また傷つく人を見たくなかったから…
あれ――こんな理由で付き合っていいのだろうか。
頭の中がごちゃごちゃになる。
「使徒、キスしたことある？」
ぶっ――いきなり何をっ…
「な　無いに決まってるじゃんっ」
「そっかぁ…そうだよね」
そうだって。
凛だって分かってるくせに…
俺は今まで彼女なんてできたこと一度も…
え――――？

それはあまりにも突然のことで
きっと世間からみた俺は一瞬で
そしてちっぽけなことで

でもそれが俺にはすごく長く感じられて
すごく大切なことだろうと感じて
頭の中が真っ白になった。

「えへへ…ごめんね」
凛に……キスされた……
俺は何も話せなかった。
罪悪感と嬉しさが混ざりあった気持ち。
まさに好奇心旺盛な子供が危険なことに身を投げ出そうとしている感覚に似ていた。
「使徒、これから付き合うってときにゴメンね。でもね、こうでもしないときっと使徒と私をつなぎとめておけるものは何もなくなっちゃうから」
どことなく寂しげに言う。
俺と凛をつなぐものなんてどれだけでもあるのに…
今までの時間(トキ)がきっとつなぎとめてくれるのに…
俺が好きなのは……凛なのに……
「それに…使徒の初めてももらったし、もう満足だよ」
満足って……
そんな…だから、俺が好きなのは……
「バイバイ、使徒」

決断

「……徒　使…徒…」
むぅぅ…誰だ俺を呼ぶのは…
「使徒！」
わっ！
「早く起きなさいよ！朝ごはんできてるからね！」
ミクか…
あれ――？
さっきのは夢…かな？
違う…あの唇の感触は本物だった。
ってことは…
初めての告白を受けてから凛に告白され、ミラにも…
そして凛にキスされた…
もう、何がなんだか分からない。
凛にどういう顔で会えばいいのだろう。
その前にまず……ミラに伝えないと――
朝食を食べ終えた…心の準備をする。
よし、言おう。
「ミラ、ちょっと話あるんだけど……いい？」
「あたし学校行く準備するねっ。ごゆっくり～」
ミクは空気を読んだのか、立ち去った。
立ち去ってからピンと張り詰めた空気が流れた。
「なぁミ――」
「ちょっと待って」
ミラは目をつぶって深呼吸を2、3回すると、目をしっかりと開いて俺の目を見据えた。
その目には迷いは無かった。
きっとミラは俺がなんて言うか分かっている。

でも、それでも俺の目から目を逸らさなかった。
「いいわよ」
そんなに見続けられると――言いづらい…
見つめられるとやっぱり可愛くて…親戚じゃないなんて聞くんじゃなかった。
ミラは本当に俺のことが好きなのだろうか？
しかし俺に選択の余地はなかった。
「早く言ってよ…これでも…泣きそうなの、こらえてるんだよ？」
そんなこと目を見てたら分かる…
だんだん目が赤くなって涙がたまってくのが分かる…
でもそれを思えば思うほど言い出すのが怖くなる。
ミラ達との楽しい家での時間が消えてしまいそうで――
「ふぅ……言うよ」
一瞬ためらってしまった。
一言言えば終わりのはずなんだが、なかなか勇気が出せない。
しかしそのままでいられるはずもなくて、言った。
「桂と……付き合うことにした」
言うときにミラを見るのが怖くて、結局顔を下に向けてしまった。
「そう、おめでとう」
その言葉は俺が思ってた言葉ではなかった。
しかしミラを見ると、言葉とは正反対の表情をしていた。
無理に笑おうと必死になっているミラ。
でもそれが見るに堪えないほどうまく笑えていない。
「殴ってもいいよ？」
本気で殴られてもいいと思った。
今までミラのことを何にも考えていなかった俺が悪い。
ドラマを見ながら顔を近づけてきたときだって、ただの悪ふざけだと思って流したんだ。
ミラがいつも抱きついてくるときは、何も考えずに拒絶することしかしなかったんだ。

ミラの手が俺の前に来た。
ピンッ！
「痛っ！」
デコピン！？
「何言ってんのよ！私は使徒クンがあの子を選んだらあきらめるって言ったでしょっ」
そんなこと言っても…
「それに私も言わなきゃいけないことあるしねっ」
何か、不安にさせる笑顔だった。

「おっす」
「はよ」
下駄箱で光と遭遇。
光は昨日のことを知らない。
きっとこれからも知ることはないだろうな。
「おはよう」
光の隣で微笑んでくれたのは海野。
このごろよく2人でいるよなぁ。
そういや前までだったら俺の家にも毎日来てたのに。
「なんかあった？」
「はっは。よくお分かりで！この度ワタクシ千葉光は海野雫とお付き合いすることになりました」
いつの間に…
「っちょ…千葉君、声大きい……」
周りがチラチラ見ている。
海野は顔を真っ赤にしてうつむいている。
「先、教室行くねっ」
走っていってしまった。
光が俺を目で殺そうとしている。

「お前が悪いだろ？」
光は大きなため息を吐いて頷いた。
教室へと向かう。
「ところでさ、桂来夢をほったらかしにするほど大切な用事って何だったんだ？」
「は！？」
やべ…声が大きかった。
顔が火照ってくる。
昨日のキスが脳裏によみがえってきた。
「なんだよ突然……昨日もしかして変なこと…」
「してない！」
また声が大きかった。
上級生にジロジロ見られる…
「そんな本気で怒るなっ！冗談だって」
冗談抜きにしろ！
真剣に俺はどうすればいいか迷ってるんだよ！
「話し変わるけどさぁ、ミラちゃんって学校来るの？」
――そうだ…
「ミクちゃんがここならミラちゃんもそうだよな～早くこねぇーかなぁ」
――
「お前には海野がいるだろっ！」
「だよなっ」
無理に笑ったのばれたかな？
やっぱ俺って最低だ。
海野と光にあった途端、ミラのこと忘れてた。
そう思うと、どう頑張っても笑えなくなった。
それは無理して笑うミラの顔がどうしても頭をちらつくから。
あと、それだけじゃない。
朝――――

「私ね、東静高校行くことにしたの」
ぇ――
それには逆に驚かされた…
「なんで？」
「別に桂さんと張り合おうなんてこと考えてるわけじゃないのよ」
でも…桂とコイツは絶対に会うことになるだろう…
桂はどう思うのだろうか。
今は既に親戚じゃないと知った身だし、嘘を言い通せる自身はない。
「作戦よ！作戦！」
作戦…？
「中々会えなくなったら使徒クンが私のほうに来てくれるようになるかもしれないでしょっ！」
やっぱりうまく笑えていなかった。
「でもさ、やっぱミクと一緒のほうがいいんじゃないのっ？」
桂の学校にミラが行くのには少し抵抗がある。
「もう、受験したの。合格ももらったわ。使徒クンの通う高校は蹴ることになるけど…もう決めたから」

『もう決めたから』

その言葉が昨日の凛の言葉と重なって

『さよなら』

といわれているようにしか受け止められなかった

――教室には凛の姿があった。
「おはよ、使徒」
「え　あ、　おはよっ」
なんかびっくりするくらい平然としていた。
が、今日話したのはそれだけだった。
時の流れは早いもので、いや、凛との会話が無かったからそう感じたのかもしれない。
気がついたら一日が終わっていた。

校門の前には桂がいた。
「っよ使徒君。帰ろっ」
「うん」
毎日来てくれるのだろうか？
それはないよなっ。
「昨日、何してたの？」
やっぱ言われると思った。
「友達のお見舞い行ってた」
「好きな人のでしょ？」
なっ！
何でこの子こんなにカンがいいのだろう。
「やっぱねぇ～…ほんっと使徒君って分かりやすいよねっ」
そんなに分かりやすいかな？
というか…どうやって誤魔化そうか。
「大体お見舞いって言ったら好きな人か家族しか絶対行かないじゃんか」
ごもっともです。
「というか、キミね、彼女いるのに好きな人のとこいくってどうよっ！減点だよ！」

減点って点数制ですかっ。
「でも桂が昨日――」
「苗字で呼ばないっ！減点っ」
苗字で呼ばないって…名前で呼ぶの！？
来夢って…ハズっ！
絶対言えないって。
そういえば俺って凛のこと呼び捨てだった…
なんで恥ずかしくないんだろ。
まぁ慣れだろうな。
「何点満点？」
彼女との会話ってこんなこと話すのかなぁ？
「知らない。けど今日は満点っ」
「なんで？」
減点されたのに満点って…

「今日はちゃんと一緒に帰ってくれたから」

見とれてしまった。
桂のこと好きになってしまいそう…
いやいや、ならなきゃだめなんだよな。
「じゃあ私の家ここだからっ」
「え！？」
ここって俺の家からかなり近い…
なんで今まで気づかなかったんだぁ！！！
「こんなに家近いのに使徒君私のことまったく気づかないからねぇ…」
肘でツンツンしてくる。
「ごめんっ　悪かった」
なんで謝るんだよ！
「あははっ。じゃあまたねっ！」

「うん　またな」

家に帰ったらすぐにベッドに横になった。
胸がドキドキして止まらない。
彼女と会話するってこんなんなのかな？
時々めちゃくちゃ可愛い顔が見られたとき、心臓が締め付けられそうになる。
俺の初めての彼女。
大切にしてやりたい。

想い

キーンコーンカーンコーン
一日終了っ！
今日も桂と一緒に帰れるかなぁ。
昨日のような表情をもっと見たい。
でもちょっと雲行きが怪しい。
もしかしたら夜は雨になるかも。
「いたいたっ！」
いたいた？
「ゴフッ…」
イテテテテ…
「彼女待たせちゃいけないんだー！それに目の前に彼女いるのにボーっとしてるってどういうことだ！」
カバンで腹をぶん殴られた。
見かけによらずパワフル…
彼女じゃなかったら蹴り飛ばしてやるのに。
「いくよっ！使徒君っ」
にっこりと笑って俺に手を差し伸べてくる桂。
やっぱり可愛いので蹴れません。
手を握って起き上がる。
女の子の手って小さくて、強く握ったら壊れてしまいそう。
起き上がり、手を離そうとしたら握りかえされた。
「このまま帰ろっ！」
え……手握ったまま！？
恥ずかしい……
桂は彼氏と手握ったことあるのかな？
なかったらこんなことしないよな。
わっ！

指と指を絡めてくる。
やばいって！そんな握り方されたら手が痙攣起こすって！
まだ校門を出てすぐのところなのにもう何キロも歩いたような気がする。
「ねぇ、使徒君って趣味ある？」
唐突だなぁ…
「まぁ……星を見ることかなぁ」
星はきれいだ。
でもそれだけの理由ではない。
星を見てるとなんだか、すべてを忘れられる気がする。
「ホント星ってきれいだよね！」
すべてを忘れて、普通の生活をしていた時のことを思い出せる。
「この辺は都会すぎることもないし、田舎すぎることもないから普通に星見えるしねっ」
悲しいことがあった時、夜空を見上げると慰めてくれる気がする。
「でも私は青空のほうが好きだなぁ。なんかすっきりするし……ってか雨降ってない？」
しかし、そんなきれいな星から目を逸らすと現実が舞い戻ってくる。
その瞬間はやるせない気持ちになるが、心にポッカリと穴が開いたような感覚も嫌いではない。
「……って、聞いてる？」
「ぁ、うんっ！」
なんか俺桂といるときほとんど文章喋ってない！
「こんな話しててもつまらないかなぁ……？」
やっば…
「い　いや、そんなこと無いって！ただ緊張してるだけで…その……」
「使徒君と話せるの帰りだけだしさ……それにお互いのことほとんど知らないからもっと知りたくて…」
そうだな…

俺桂のことまったく知らない。
なんで付き合ってるかもよく分からないかも…
「使徒君は私のこと気にならないの？」
「気にならないわけない！」
必死にごまかしてる俺って惨め……
「でも他の子のほうが気になるんでしょ？」
―――
なんと返してよいかまったく浮かばなかった。
今は桂のことを好きになろうとしている。
でも心のどこかで凛を忘れられない気持ちもある。
「帰る」
「え！？」
俺の手をパッと離し、走っていった。
こんなの…ダメだ。
また俺は自分のことばっかり…
「桂っ！」
雨の中、桂を追いかける。
桂ってあんなに足速かったのか。
あと少し…
「桂っ！」
捕まえた。
手をしっかりと握って呼吸を整える。
きっと俺がもっと恋愛経験豊富ならここで抱き寄せたりするんだろうなぁ。
「なによ…」
「俺、桂のこと好きになるから、絶対、」
振り返った桂は泣いているのだろうか？
雨でよく分からない。
「俺、不器用だから、ゆっくりしか無理だけど、少しずつ桂のこと好きになるから…」

息がきれて言葉が続かない。
「だから…」
パンッ
「桂って呼ぶなって言ったでしょ……」
そんだけで顔思いっきりたたくこと……
「不安なんだよ？高校違うから会えないし話しかけてもボーっとしてるし……」
結局俺は知らない間に桂のことを傷つけて…
早く凛のこと忘れなければ…
「ホントは使徒君ってこんな人なのかと思っちゃったぁ」
まさか…フラれる！？
「でも追いかけて来てくれたから……ありがと」
こういうとき、彼女を無性に抱きしめたくなるんだと思った。
胸がキュンとして理性を抑えきれない。
抱きしめていいんだよな？
俺彼氏だし…
桂――――
「雨すごくなってきたね。私の家寄ってきなよっ……って何やってんの？」
中途半端で止めてしまった……
「カバン……持とうか？」
せっかくのチャンスがぁ！！！
「ありがとっ」
――ま、いっか。
カワイイ笑顔見れたしな。
「へっくしゅんっ！」
寒…
「ホント風邪ひくよ！早く入ろ！」
気づいたらもう家の近くまで来ていた。

慣れてるから

「お邪魔しま～す……」
「って何言ってんのっ！」
俺を軽く小突いた。
意味不明なまま上がろうとする。
が、一歩が踏み出せない。
緊張している。
「どうしたの？早くしないと風邪引くよっ」
「ぁ、うん」
言葉をかけてもらって緊張がほぐれたのか、やっと足が上がった。
しかし桂の父さん怖かったらどうしよう…
――うちの娘をお前みたいな軟弱者にはやらん！！！！！――
こえーよ！
――私の子にはもっとカッコいい男の子のほうが似合うわっ――
母さん失礼だなぁ！
――私は使徒君のいいところいっぱい知っているからお付き合いしたいの！――
桂は俺の妄想の中でも可愛くて優しいなぁ。
「もしかして今日予定あったりした？」
はっと我に返ると、廊下で突っ立っていた。
「そんなこと無いよっ。ただ桂の家族に迷惑じゃないかなぁって……」
どちらかというと迷惑というよりも緊張というほうが正しい。
女の子の家とかあんまり行ったことないし……
「お父さんは単身赴任、お母さんはたまにしか帰ってこないよ」
悲しそうな顔を浮かべている。
その気持ちは俺に、桂の心が剥き出しになっているようなほど伝わった。

「そんな顔しないでっ。もう慣れてるからさ！」
精一杯の笑顔を作って俺に向ける桂。
慣れるわけない。
家に誰もいない孤独感。
返事の返ってこないつらさ。
空っぽの空間。
苦しさは、俺が身をもって知っている。
こんなことするつもりなかったのに…
「使徒君っ！？」
「なんでそんな無理して笑うんだよ…辛いなら辛いって言えよ…」
ただ無性に抱きしめてやりたくなった。
雨でぐちゃぐちゃなまま気持ち悪い。
でも、それでも苦しさを少しでも減らしてやりたかった。
「寂しいなら寂しいって言えよ……」
桂は抱きしめられているだけだった。
「うん…使徒君、私が思ってたよりずっと優しいんだね」
「え？」
俺が手を離すと、桂は少し後ろに下がった。
「でも私は大丈夫だから！心配しないでっ」
桂は強いな…
そうだ、俺とは違うんだ。
桂はいつでも会えるんだ……俺と違って。
「ずっと濡れたままだから寒いでしょ。お風呂入ってきなよ！」
俺は背中をぐっと押されながら脱衣所まで連れて行かれた。
「出たらお父さんのスウェットでも着て。そこにあるやつ勝手に着ていいから」
そういってそそくさと立ち去った。
まだ付き合って3日目。
出会って3日目。
ほんとにいいのかな？

「使徒君ってなんでこんなにキュンとすること言うのかなぁ…」
心臓のドキドキが止まらない。
使徒君のこともっと好きになっちゃいそう。
私が苦しんでることすぐ分かってくれるなんて…
いつも誰だって言った。

『親がいないなんてせーせーしていいなぁ』

『うちの親もいなくなればいいのに～』

『1人で偉いねぇ』

でも使徒君は違った。
私の苦しみに気づいてくれた。
他の人とは違う、私の彼氏…
大好き…言葉じゃ表せないくら……
「桂――」
「ぁ！　次私入ってくるねっ！部屋で待ってて！」
あ～もう！なんでこんなこと考えてるときに来るわけっ！

待ってろって言われても…ねぇ。
桂の部屋に入ったが、どこに座っていいかすら分からない…
取り合えずベッドに……
……
……

ぎこちねぇ！！！
ああ～時間長っ。
って言っても早く来てもらったらそれはそれで困る…
何を話せばいいか分からない。
俺テンパッたらどうしよっ！
緊張する～。
今家は桂と2人だけだろっ。
ありえねぇし！
というかさっき桂に抱きついたから余計話しづらいし…
俺なんで抱きついたんだよー。
ばかばかばかばか。
ガラガラガラ
桂が出てきたようだ…

間違い

パジャマで出てきた桂。
風呂上りのその姿は、いつもより一層輝いて見えた。
さて、ここからが問題。
何をするのだろう。
まさか、あんなことやこんなことを……
そんなことを考えてると、桂はテレビのスイッチを入れた。
適当にチャンネルを回しているのだが、コマーシャルばかり。
「や～めた」
チャンネルを回すのをやめて、どさっ、と俺の隣に寝転がった。
桂は後ろから俺を見てるんだろうか…
ますます体が硬直してしまう。
「ねぇ」
振り返ると桂は頬をベッドにつけて丸くなっていた。
おまけに、パジャマの第2ボタンくらいまでを開けて、乱れた服装でこちらを見ていた。
「っ……」
「意外とシャイなんだね」
息を呑んで顔を真っ赤にしている俺に向かって、遠慮なしにグサリとくる言葉を投げかけてくる。
いたずらっぽい笑みも他の人には無いものを持っていた。
恋愛経験無しの俺にとって、さっきのはありえないポーズです。
さっき抱き締めれたこともまったくもって不思議なくらいなんだから。
「えぃっ！」
「わっ！！！」
今度は俺の膝の上に頭を乗せてきた。
桂もミク達と一緒で俺をからかってんのかな…

下からの視線に目を合わせることが出来ず、あらゆる方向に視線を移している俺。
「こっち見てよ」
ふっと膝が軽くなって、つい反射的に下を見てしまった。
「うわぁあっ！」
顔がとても近くにあった。
（ド、ドアップの桂めちゃくちゃ可愛い……）
「ひ、人の顔見てそんなに驚くことないじゃない！」
俺もかなりびっくりしてベッドの上に上がり込んでしまったが、桂も相当びっくりしたみたいでベッドから降りていた。
「ごめん……」
桂の機嫌損ねてしまったかも……
ドサッ
「え」
立っていた桂はすぐに俺の横に飛び乗った。
「せっかくうち来たんだからもっと楽しく話そ？」

ベッドの隅で、くっ付いてたくさん話した。
笑ったり、怒ったり、しょ気たり、いろいろ。
テレビをつけると今度は面白いものがやってたりした。
俺は彼女ってことに意識しすぎていたみたいで、話していたら普通の女の子だった。
可愛い、普通の女の子。
彼女のことも少しずつだが分かってきている。
期待していたことは無かったが、期待以上に楽しい時間を過ごせた。
「こんな時間までどこほっつき歩いてたのよ！！」
玄関を開けた途端に罵声が飛んできたが、とても驚き、そして嬉しさが込み上げてくる。
俺は見放されていなかったみたいで、まだ元通りまでとはいかない

かもしれないけど、なんとかなりそうな気がした。
「スマンスマン」
そんな言葉じゃ絶対に通るとは思ってないが、他に良い言い訳も浮かぶわけでもない。
「もしかして彼女のとこ行ってきたの？」
「行ってきたけどお前が思っているようなやましい事は何一つとしてしていないからな」
結局言うなら始めっから言ったほうが説得力あるのに、と後悔した。
しかし、それ以上ミクは問いただすことなくじっと立っている。
俺から何か言うのを待っているのだろうか。
「何？」
ミクからしたら俺がずっと眺めているように感じるのだろう。
何、と言われても特に無いのだが。
「ただいま」
ふと自分の意思を反して言葉が出た。
その言葉は久しぶりに発した言葉で、まだミクは言葉を返してくれないだろうと思った。
でも口から漏れてしまった言葉は元に戻ってくることは出来ない。
「おかえり」
予想をまったく無視して、少し照れながらそっけなく言った。
ぶっきら棒な言い方だったが、それでも嬉しかった。
「何薄笑い浮かべてんのよ、気持ち悪い」
普段なら絶対に気に留める一言だが、今は嬉しさが勝っている。
「ありがとな！」
そういって階段をドタバタと登り、自分の部屋へ。
「ホント気持ち悪いったらありゃしない……」
ボソッと呟かれた言葉は俺の耳に届かなかったが、例え届いたところで俺は気持ち悪い返事しか出来なかっただろう。
部屋に入った途端、ベッドに倒れこんだ。
そのまま今日一日を振り返っていると、いつの間にか眠りについて

いた。
ミラとは会わなかったことも含めて、振り返った。

また、雨だ。
雨の日は憂鬱になる。
学校行くのにも一苦労だし、傘差してても結局ぬれる。
ホントに嫌だなぁ。
かといってまだ入学してから3ヶ月足らずというのに、学校をサボるのは危険だ。
6月は梅雨の時期。
仕方が無いと思い、傘を片手に、カバンを片手に、学校への道のりを歩み始めた。
でも今年はまだ雨が少ないほうだ。
教室へと入り、自分の席へ。
教室に行くまでも思ったが、周りの視線がすごく痛い。
俺は何かしたか？
考えながら雲を眺めていると、突然光った。
1、2、3、ゴロゴロ…
1キロ先ぐらいで光ったものだろう。
「席つけ～」
ホームルームか…めんどいな。
今日はやめにしようぜ。
ピンポンパンポン
（鶴山先生、鶴山先生、至急職員室まできてください）
久しぶりに俺のへんな力使った気がした。
しかも無意識に。
「今日はまぁ特に連絡することもないし、終わる」
鶴山が出て行くときに、ぶつぶつ言っていたが、特に詫びの気持ち

もなかった。
「おい、使徒」
はぁ……
俺を呼んだのは予想がつくであろう、最近彼女が出来て浮かれ気分で、見ていると非常に腹が立ってくる光だ。
小声で話しかけてくることから察すると、人に聞かれたくないことか何かであろう。
彼女の相談か？いやいや、青春満喫している人はいいねぇ～。
俺なんか悩んで悩んで今も少し悩んでるんだぜ？
「おいってば」
光の目をふてくされた（と自分で思う）顔でずっと眺めていると、反応を確かめるようにもう一度呼びかけてきた。
「何？」
今日は雨＝憂鬱＝動きたくない＝話すのめんどくさい
という、少しイコールで結ぶには考慮しなければならない部分も含めた等式を頭に浮かばせながら答える。
「お前凛泣かせただろ」
さて、1元は数学か。
ただでさえ気分が落ち込んでいるというのに、こん……
「おい！」
突然の大声にビクっとした。
クラスの人たちの注視もさらに集まる。
その声がふざけていたとか、笑いながらとか、そんなものだったら俺は軽く流してた。
しかし彼、千葉光は真剣な眼差しで、怒りとは違う意味での力を声に込めてぶつけてきた。
「何でそんなに怒って……」
「分からないのかよ……ずっと一緒にいたじゃねーかよ……少しは凛の気持ち考えろよ……」
俺には今降り続いている雨に打たれるよりも、今鳴り響いている雷

に体を突き抜けられるよりも、キツイ一撃だった。
「ゴメン」
こんな言葉でしか返答できない自分が惨めでたまらない。
それでも今凛に優しくすると、気持ちが揺らいでしまいそうで怖い。
ガラスのコップが落ちて粉砕されるように、もろく、淡い恋はすぐに砕けてしまいそうで。
「優しくとか、気を使うとかじゃなくて、普通でいいから何とかしてやれよな」
一瞬心を読み取られたのかと思ったくらい、的確な答えを俺に教えてくれた。
「ありがと」
もう凛のことは解決したつもりでいた。
違った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6687d/

妙な学園生活

2010年10月8日15時08分発行